零の役者～Fateの劇をやってたらルイズに召喚されました～（勘違いもの）

鞍馬天狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零の役者～Ｆａｔｅの劇をやってたらルイズに召喚されました～
（勘違いもの）

【Ｎコード】
Ｎ５０９１Ｊ

【作者名】
鞍馬天狗

【あらすじ】
知り合いに頼まれてＦａｔｅ劇をやっていたらルイズに召喚されてしまった青年のお話。主人公はセイバー風味の男です。原作通りのセイバーさんでないと嫌！って人は不快な気持ちになるかもしれないので注意してください。ちなみにＦａｔｅの本物のキャラは出てこない予定なのでそこは期待しないでください。

追記：この作品はご都合主義的な表現が結構あるかもしれません。

（まぁ、元のゼロ魔が完璧ご都合主義ですが）ですのでそういうのが嫌な方はバックした方がいいかも？

追記２：最近進学（専門学校）したのですが（専門学校って進学って言うのかな……？）、マジ忙しすぎて書く暇ありません。凄い不定期になると思いますのであしからず

第一話『偽セイバーがルイズに召喚されたようです』

俺は他人から見るとお人よしらしい。自分的には全く持ってそんなことは無いと思っているのだが、とにかくそうらしい。

取り合えずそんなことは置いといて、今俺は知り合いに頼まれて劇の役者をやっている。俺のたった一つの特技が演技であることとで選ばれたのだろう。

そんな俺はそろそろ出番がもう少しで始まるということで今ステージの下で待機していた。出番になると、上で煙が上がりその間にリフトがあがって然もいきなり現れたように演出するという話だ。ちなみに今やっている劇はＦａｔｅ何とかという作品を基にした劇なんだが……問題がある。何故か役者は全員男で構成されている。なんでもこの劇は腐女子の腐女子による腐女子のための劇だから…だそうだ。うーむ、なるほどな。ところで……腐女子って何だろうか？　女の子ゾンビのことか？

まぁいいや、話を戻すけど、実は俺、本当はこの劇にかかわる人ではなかったんだが俺の役どころの人が怪我したとかで一昨日いきなりやってくれと頼まれた。そのせいで台詞覚えるのに精一杯で正直物語自体は全然覚えていない…が文句は言わせない！　ええ、言わせませんとも！　悪いのはあっちなんだから。俺だって怒る時は怒りますよ。

と、ちょっと思い出して苛々し始めていた俺だったがどうやら出番のようだ、リフトが上がり始めた。俺は深呼吸してから頬を叩いて気合を入れた。やり過ぎてひりひりするがそんなことは気にしない。今しなくちゃいけないことは役になりきること。

……ってかやっぱ嫌だなー女の子の役なんて。俺に役を頼んだ自称凄腕魔法腐女子曰く顔立ちが今いる役者達で一番女の子っぽい…むしろ女&一番身長が小さいからしい。俺はこれでも１７２センチあるんだが実際この中では一番小さいんだからそれはしょうがないと思う。

でも顔立ちが女の子っぽい…むしろ女、は酷いでしょう俺だって立派な青少年。勿論女ではないから女の子が好きだしエロは大好きだ。自分でも女っぽいとは思っていたけどもうちょっとオブラートに包んで欲しかった。可愛い系の顔立ちだねとか……いや…それもそれできついかもしれない。

おっと、そんな事お考えているうちにもうそろそろステージに上がりきるな。さっさと終わらせてこの真っ白な紳士服に銀色アーマーを付けた意外と重いコスチューム（案外カッコいいので実は密かに気にいている）ともおさらばしよう。天井の鏡っぽい扉をくぐればそのときから俺はセイバー（男）だ。いくぜっ―――

第一話『偽セイバーがルイズに召喚されたようです』

［Ｓｉｄｅ：主人公］

予定通りステージ上は煙が出ているようで周りは見渡せないが、

一つ驚いたことがある。煙の僅かな隙間から青空が見える。そしてステージに草が生えている。一つではなかったがそれは言葉の綾ってやつだ。誤解されると自尊心が傷つくので決して間違えてはいないと言っておく。ええ間違えておりませんとも。ここ重要なので2度言いました。

話を戻そう。目は開けたといっても一瞬で、さらに薄目だったので、確かかどうかは判らないがたぶん手の触り心地から地面の草は芝生と思われる。

凄い！今時の演劇は草まで用意するのかと内心で感動していると大変なことに気づいた。頭に被っていた金髪のカツラが吹っ飛んでしまったようだ。たぶんステージに上がった時の演出の爆破で飛んでしまったのだろう。慌てて周りを探す。すると光に反射してきらっと光るものが見えた。あれか！　この煙が晴れる前にカツラを取らなくては！　俺は人生のうちでも恐らく一番であろう素早さで駆け寄り煙でよく見えないながらも必死にそこら辺に手を伸ばした。が、すってんころりんと湿った芝生に足を取られ前のめりに倒れこんだ。

「ぐはっ！」

すると同時にそんなくぐもった呻きが自分の下から聞こえた。そんなことよりもカツラを奪取することには成功したらしい。手になにやら感触が伝わる。それを取ろうと引っ張るのだがなかなか取れないクソッと思って力を込めて取ろうとしていたら煙が晴れてしまった。

———やばい！

と思ったがもう遅い。カツラは諦めてこのまま演技しようと思っていたら突然横からでっかい氷柱（つらら）がいっぱい飛んできた。それを転がりながら何とか避けて飛んできた方を見ると青髪の少女が木の棒をこちらに向けて立っていた。その小さな体でどうやって投げたのか、そしてどこに氷柱がそんなにあったのかは知らないがどうやら犯人は彼女らしい。

……はて、こんなシーンだったろうか？いや、待てよ確かストーリーではランサーに追われていて死にそうになった主人公の前に現れるってシーンだったはずだ。ランサーの特徴は青髪で槍を持っているというものだ。彼女の特徴と照らし合わせてみる。

青髪…一致。槍…あの木の棒がきっとゲイ・ボルクなんだろう、そうには見えないが。きっと彼女がランサー役なんだろう。こっちを睨んでるし。

そういえば例の自称凄腕魔法腐女子なあいつが言ってたっけ、おおまかなストーリーはそのまんまだけど原作と全く同じじゃ新鮮感が無いから色々と微妙に変えるって。なら納得だな彼女がランサーだ。

とここまで考えたところで一つ疑問。あの子はどう見ても女の子だろ。あれで男だったら世の中何か間違ってるね。大体俺より小さい役者はいないんじゃ無かったのかよ！　ってことはあのクソ腐女子俺をだましやがったな！　絶対俺よりあのこの方がセイバー役適任だろう小さいところとか胸無いところとか、落ち着いた雰囲気とか。絶対配役間違ってるね、断言する。

まぁ、取り合えず俺を騙したのは今は不問にしよう。なんたって今は劇中だからな、芝居に専念しなければ。取り合えず士郎役を探

そう。今は劇中だ、役者が相手が誰で何処にいるか分からないなんて演じる以前の問題だ。俺は必死に誰が士郎か分からないなんていう今の状況を悟られないように目線だけで士郎を探す。……分からない……誰が士郎か判んないよー！　ック……こうなったら仕方が無いそこにいるどう見ても士郎には見えない桃髪の女の子にしよう。どうか彼女が士郎でありますように。ってか、女の子率高くね？男だけでやる劇なんじゃないのかよっ！

取り合えず、原作通り彼女は尻餅ついて呆然とこっちを見ていることだし俺もちゃんとやらなきゃ。もうどうせミスってんだしこの際だから適当にアドリブとかも混ぜてみようかな。

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上した。問おう……貴方が私のマスターか？」

俺は胸に右手を当てながらそう言った。我ながらこのアドリブはいいかもしれない。よし、このまま突っ走ろう。

「えっ？……そ、そうよ！　私がマスターよ！」

私……？　まぁ、細かいところは置いといて、それにしてもこの子演技上手いなセイバーが召還された時の呆然とした士郎を上手く演じきっているよ。本当に唖然としてるようだ。うん、この子は将来大物になるな。

「承知した。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。マスター、指示を」

この子の将来のためにもこの劇は何としても成功させなくちゃなと思いつつ、アドリブで騎士っぽく方膝ついて頭を傾げながらそう

言った。俺今結構カッコいいんじゃね？

［Ｓｉｄｅ：ルイズ］

今日は進級に必要な大事な試験それが今日行われている春の使い魔召喚だ。サモン・サーヴァントで自分の半身たる使い魔を呼び出す儀式。

普通は呪文を唱えれば自分に合った使い魔が召喚されるんだけど私は何回も失敗していた。もう次で１３回目になる。周りのクラスメイト達はうんざりした顔で私に文句を言ってきていた。正直涙が出てきそうになったけど、我慢しなくちゃ……私は由緒正しきヴァリエール家の娘なのだから！

「宇宙のどこかにいる私の僕よ！　神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！　わたしは心より求めうったえるわ！　我が導きに答えなさい！！」

それと同時に爆発が起こった。爆発の衝撃で尻餅をつきながらまた失敗か……と気を落としていると煙の中に影が見えた。

「や、やった！　成功！？」

どんな使い魔なのかと心躍らせて煙が晴れるのを待つと、中にいたはずの影はいつの間にかその場から消えていた。

「あ、あれ？」

結局失敗だったのか。やっぱり魔法もろくに使えない私に使い魔なんて……と落ち込んでいたら左側で悲鳴が起こった。失敗のショックで立つ気力もなかった私は気だるげにそちらに振り向いて驚いた。

たぶんここ数年で一番の驚きだったに違いない。何とそこには白銀のナイトタキシード（ルイズ命名）に身を包んだ黒髪黒目の青年がコルベール先生の首を右手で掴み取り押さえていたからだ。

コルベール先生は呪文を唱えようとしているが、喉をきつく押さえられているので呪文を詠唱できないでいた。何がどうなっているのと混乱しているとタバサが『ウィンディ・アイシクル』を彼の頭目掛けて放った。狙われた青年はそれを確認することもなく横に飛んで避けるとようやくタバサのほうに顔を向けて鋭く睨んだ。睨まれたタバサは冷や汗をかきながら一歩後ろに下がる。

普段感情を見せないタバサがあそこまで狼狽する姿なんて初めてでなかろうか？　タバサはシュバリエの称号を持っていると聞く。シュバリエは身分に関係ない実力による称号だ。つまりタバサはそれだけの実力者ということになる。そんな彼女をが怯える彼は一体何なんだろうか？

私が呆気にとられていると彼は静かに立ち上がり私のほうに向かって歩いてきた。周りに緊張が走る。タバサも何かしたら何時でも魔法を放てるように彼に杖を向けて警戒している。私もそんな皆と同様に凄まじいほど緊張していた。

見た感じ彼は平民だろう。だが確かに『神聖で美しく』の願い通

り彼は女性と間違えそうな中性的な顔で、穢れを知らない純白のナイトタキシードと相俟って何とも形容しがたい神秘的なオーラを放っているのだ。緊張しないなんて無理というものだ。

彼が一歩また一歩と近づくたびに私の心臓が跳ね上がる。体はまるで金縛りにでも合ったように動かず視線すら外せない。そうこうしているうちに彼は私の目の前1メイル程のところに立つと私を静かに見下ろしてきた。何をされるんだと不安になって、この状況をどう打破しようかと思っていると、彼が動きを見せた。周りの温度が2度ほど下がった気がした。

――――私は一体どうなるの……

私は彼に殺されてしまうのかと諦めかけていた私に、彼はまるで王を前にした騎士のように右手を胸に当てると、思いもよらない言葉を私に向かって紡いだ――――

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上した。問おう……貴方が私のマスターか？」

と――――

「えっ？　……そ、そうよ！　私がマスターよ！」

一瞬彼が何を言っているのか理解できなかった。いや、現在進行形で頭は混乱している。マスター？　私が？　何とか言葉を返した私だったが、我ながら何とも無様だ。そこで気づく。

――――私は何に怯えていた？　平民だ。私は貴族なのに！

悔しさが滲み出している私の心境など気にもせず彼は言葉を続けた。

「承知した。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。マスター、指示を」

跪き私に首を傾げながら――――

第一話『偽セイバーがルイズに召喚されたようです』（後書き）

正直思いつきなので作者の自己満足な話になっていくと思います。計画性も何も無いので何の前触れも無く更新停止する可能性があります。それでもいい方は続きを楽しみにしてくれると嬉しいです。更新が続く一番の栄養は感想などです。酷評されると作者は本気で泣くので優しくしてください。

感想等についてですが、単につまらないの一言で終わらせないでください。つまらないなら何がつまらないのか、どうすれば面白くなるかのアドバイスをいただけると幸いです。

それと、作者はゼロ魔もＦａｔｅも中途半端な知識しかありません何しろ思いつきなので……（汗

ですから、アニメと小説、ゲームがごっちゃになってたりします。そこは勘弁してください。

もし間違えたことを書いていたらどんどん指摘してくださると非常に助かります。

あと最後に１つ、作者はなるべく深夜０時前後に投稿するようにします。一応報告。もしかしたら自分の作品を楽しみにしてくれる心優しき人もいるかもしれないので（笑

ではっ、ということでさようなら～！

第二話『どうやら物語が始まるようです』

私はこのトリステイン魔法学院に勤めて２０年経つ中堅の教師だ。昔、命令とはいえ残虐な行いをしてしまった私は今、この学院で生徒達に尽くすことによって罪を償っている。

しかしだ、もう２０年の間、本格的な戦いはしていなくてもその経験は今も体に染み付いている。教師人の中でも戦闘に関しては自分が一番であると自負していた。だからこそ、危険の伴う使い魔召喚で何か予定外の使い魔が呼ばれて生徒に危害が加えられないようにと自ら志願したというのに――――彼は一体何者なのだろうか。

第二話『どうやら物語が始まるようです』

［Ｓｉｄｅ：コルベール］

私は先日ミス・ヴァリエールの召喚した使い魔についてどうしても気になっていた。何の抵抗も許すことなく一瞬で私を取り押さえたあの動き。きっと彼は瞬時に私があの中で一番強いと判断して行動したのだろう。戦闘において隊長を狙うのは定石、あの時であれば私であることは疑う余地も無い。

そこまで考えて私は多分、人生で始めて本当の恐怖を感じた。あ

の時彼は何時でも私を殺せたのだと気がついたからだ。

取り押さえられていた時は苦しくて何が何だか分からなかったが、よくよく冷静になって考えれば、接近戦の不得意なメイジは相手を近づかせないのが当たり前。勿論私の油断もあったろうがあんなにスムーズに懐に入られたことは初めてだ。きっと彼は何年もの間、対メイジ戦の技術ををひたすら鍛錬し、そして幾たびの戦場を越えてきたのだろう。

戦闘では少なからず出てしまう『殺気』を微塵も感じさせず、一瞬で相手の懐に入り、呪文を詠唱させないように首を押さえる。

確かにそれは魔法の使えない平民が理想とする最も効率の良いメイジの制し方だ。だが実際それを使えたものなど私は『彼』以外知らない。なぜなら、その動きはあくまで『理想』であって普通の人間には到底不可能な無理な動きだからだ。たとえ、その無理な動きが出来る肉体を手に入れたとしても結局『出来ない』という事実は変わらないだろう。魔法を使えない平民を近寄らせない方法などいくらでもあるからだ。例えばエア・カッターなどの風系統の魔法。風は実体が無いので勿論平民には見えない。そんな彼らでは、何が起こったのかわからないうちにやられてしまう。それに普通、平民は多少なりともメイジを恐れる傾向がある。人によってその大きさは違うが、絶対に心の奥底にはそれが根付いていて、いざメイジとの戦闘になった時には思うように動けないのだ。

だが……彼は違う、私たちを全く恐れていないのだ。我々をまるで虫けらぐらいにしか思っていないような何処までも深いあの漆黒の瞳。ミス・ヴァリエールと契約した後に私や周りでミス・ヴァリエールを罵倒していた者たちを一瞬で恐怖の底に落としたあの眼差しは……まるで自分の君主を愚弄する不敬の輩に向けるようなそん

な眼差しだった。

――――あれは我々には考えつかないもっと強大な存在だ。彼は人間ではないもっと高次な存在なのだ。

と、私の直感が危険を伝えている。早く彼の正体を――――

「こ、これは……！」

それは偶然だった。なかなか正体の分からない彼に若干諦めが入ってきた時に、駄目元でたまたま開いた『始祖ブリミルの使い魔たち』。

そこには彼の左手に現れたルーンと酷似したものがあったのだ。

「そうか、彼は神の左手・ガンダールヴ……！　それなら彼のあの強さも納得できる……！」

ガンダールヴはあらゆる武器を使いこなす使い魔だと聞く、私を取り押さえた時、彼は腰に下げている黄金の剣を使う素振りも見せなかった。体術のみであそこまで強い彼が武器を持ったら一体どれだけの――――

「いけない！　そんなことよりもこのことを早く学院長に報告せねば！」

そう、今は一人で考え込んでいる場合ではない。学院長に早く報告して指示を仰がなくては！　これは私一人の手に負える事柄ではないのだから……！

［Ｓｉｄｅ：主人公］

Ｆａｔｅの夢を見ました。っと言っても原作は自分の役に関係するところしか知らないからかなり適当だけど。

まぁ、そんなことは置いといて、今俺はどこかの広場で迷っていた。というのもあの広場での出来事の後、何故か呆然としている周囲の中でルイズという少女とキスという方法で主従の契約して、ちゃんと令呪らしきものが左手に現れているのを確認してスゲー超リアルじゃんと興奮していると、ルイズがなにやら神妙な顔つきで事情を話し出したのが話の発端だ。一応聞いてみるかと軽い気持ちでいると色々厄介なことがわかってきた。

俺って馬鹿かよと自分に呆れた。何で俺と契約したのが士郎じゃないのかって時点で何かおかしいって気づかなかったのかと。どうやらここはイギリスとかあそこらへんのヨーロッパのハルケ何とか地方にあるトーリーステン……王国？　ってところにある専門学校らしい。何の専門かは教えてくれなかったが魔法がどうのこうのとか言っていたので、たぶんマジシャン養成学校なんだろう。実際皆空飛んでたし。さすが将来のプロマジシャンだ、全く種がわからない。きっと自分のような素人では気づけない巧妙な仕掛けがあるに違いない。今度教えてもらうのもいいかも知れないな。氷柱飛ばしたりとか出したりね。

おっと話がそれたな、話を戻そう。あの後俺はルイズに命令され

てルイズの部屋に連れられてきたのだ。右も左も分からない異国の地に拉致されてしまった俺を親切にも面倒見てくれるらしい。その代わり自分に使い魔として従って欲しいとの事。使い魔というのは恐らくマジシャンの世界の業界用語だろう。知ったかぶりで、当たり前ですとか何とか言っといたが、要はあれのことだろう？　よくマジシャンの横とか後ろとかでサポートしたりしているお姉さんとかのポジションの事だろう？　そのくらい導き出すのは名探偵の俺からしたら余裕なのさ。俺を舐めないで欲しいね！　それに自分がマジックをしている時のサポートが主な役割だとルイズが言っていたし、俺の推測は正しいはずだ、いや断言するね俺は正しい。

「ところであんた名前は？　さっきはセイバーって名乗ってたみたいだけどまさかそれが本名な訳無いわよね？」

するとルイズが突然そんな事をたずねてきた。名前だって？　どうしようか……ここで本名言っていいのだろうか？

本名教える→皆が俺の名前覚える→たまたま路上で職務質問→捕まってしまうので逃げる→　名前を知っていた奴に警察が聞いて本名が指名手配→オーマイガッ！　ということにならないだろうか？

……いやありえる、俺を無理矢理拉致するような国だ、そんな理不尽があっても何も不思議じゃない。もしそれで捕まってしまったらもう二度とお日様の下を歩けないかもしれない。そんなの絶対嫌だ！

……ならどうしよう、こういう時はどうすればいいんだ！？　と泥沼に嵌っている俺にルイズ嬢は追い討ちをかけるように問いただしてくる。どうしよう本名は教えれないけどセイバーの本名なんて知らない。どどどどうしよう！　ティガーたすけておくれよぉ！

と、ここで俺に神のお告げが聞こえた。

……いや、待てよたしかセイバーってアーサー王って設定じゃなかった？　じゃあアーサー……は有名すぎて偽名だとばれるだろう。ここは（多分）イギリスだ、そんなところで自分はアーサーって言うことは日本で俺は織田信長だって言ってるようなものだ。じゃあ、どうしよう。……待てよ、そういえばこの前の世界史の授業でアーサー王伝説について話していたな。アーサー王の名前って確か……

「ルキウス・アルトリウス・カストゥス」

だったっけ？　……多分これで合ってる筈だ。そういえば、話と全然関係ないけどアルトリウスの部分は『熊の男』って言う意味があるんだよって先生が言ってたな。意外とむっさい男だったのか？　ん？　いや、『熊の男』は氏族名の『アルトリア』の方だったけか？　まぁ、そんなことは今はどうでも言いや。今は取り合えずなんて名乗ろうか考えなくては。うーむ……ここは格好良く『クラウド』とか『ティーダ』って名乗――――

「分かったわ。長ったらしいからアルトって呼ぶから」

あ、あれ？　何か勝手に名前が確定してる！？　も、もしかして口に出てた！？

「ち、ちがっ――――」

――――うんだよと続けなかった。そんな期待を込めた瞳で見つめられたら今更、適当な名前なんですなんてとても言えない。そんな俺を不思議に思ったのか続きを催促してくる。ック、こうなったらやけくそだ！

「血が……ルイズの血が欲しいのです」

がーーーー！　俺は何を言っているんだぁぁぁ！　いきおい任せに何を口走っているんだ俺はーー！　案の定ルイズも顔を引き攣らせている。だが、吐いた唾は飲み込めない。しょうがない……こうなったら最後の手段だ。このままぶっちぎるぜい！

「ど、どういうこと？」

「私はこの世に現界しているだけで魔力（やる気）の大半を費やしています。そのため常に私の魔力は空の状態に近い。これでは（警察に見つかった時の）戦闘に支障が出てしまいます。然らば、足りない分は然るべき所から補給するのが定石でしょう？」

「それがつまり私。魔力は血が最も多く含まれているから……ということね」

「そういうことになります」

嘘には多少の真実を。それを実行してみたんだがこれでいいんだろうか？　……嘘ばっかりな気もするんだけど……。

おっと、そんなことよりもどうやらルイズは冗談だと思ってくれたみたいだ。話に乗って返してくれたのがいい証拠だろう。一安心だなこ――――

「それなら仕方が無いわね……」

あ、あれれ？　そこは笑う所でしょ？　空気読もうよ！　これが

所謂『ＫＹ』という存在なのか？　ック、ニュータイプか！？　え？　マジ？　本気？　何でタンスからナイフ取り出してんの？　何でタンスにナイフが入ってるのとか色々突込みどころは満載だけどその前になんであんたは本気で手首をリストカットしようとしてんの！？

「ルイズ、今は結構です。この学園にいれば（警察と）戦闘になることなど無いでしょうし、それに後のことを考えなければ一時的に全力を出すことは出来ます。いつ戦闘になるか分からないのですから必要の無い時に貰ってもルイズの体に傷を付けるだけで大して意味がありません。ですから、戦闘になりそうな時、もしくは終わった後に……必要な時だけ分けてもらえば十分です」

……ってか、自分から血をくれって言っときながらイラネーとかナメとんのかいって話だよな。まぁ、でもルイズも納得してるし良いか。

と、まぁそんなこんなでその日は夜が更けていき次の日の朝、洗えと渡してきた下着等を持っていざゆかん！　って息巻いて出てはいいが洗い場が分からないことに今更気づき、一旦ルイズの部屋に戻ろうとしてさらに迷ったというわけで最初に戻るわけだが……一つ言いたい俺の前で全裸になるということは食べちゃっても良いのだろうか？

［Ｓｉｄｅ：ルイズ］

「……これでいい。聖杯を自らの手で斬り壊した以上、私は英霊ではなくなりました。
――はじめから、その必要もなかったのです。王は国を守った。ただ、国は王を守らなかった……まったく、そんな当たり前の事を、どうして気づかなかったのでしょうね、■■■」

青いドレスに身を包んだ金髪碧眼の少女が目の前に立っている少年に告げた。その表情は嬉しさと悲しさ、寂しさ、愛おしさを一片に詰め込んだ何とも複雑な笑顔だった。そんな彼女に少年が一言だけ呟いた

――セイバー

彼の表情は見えなかった。でもこれだけは分かる。彼女と彼は愛し合っているのだと。そしてもう二度と会えないのだと。今これが二人の最後の時なのだと。

「……体が透ける、聖杯の恩恵もなくなった。これでようやく、私はあの丘に戻れる」

少女の体が透けていく――

「最後に、貴方に心からの感謝と、ありったけの親愛を。私が築こうとしたものは理想郷とはほど遠く、万人を救う事はできませんでしたが――
――それでも胸を張れるものだったと、貴方は伝えてくれました」

少女の体がオレンジ色の太陽の光と白い花が咲き誇る丘を背景にだんだん薄れてゆく。

――――セイバー！

少年が駆け寄って抱きしめた。それに答えて少女もゆっくりと抱きしめる。

「駄、目ですよ、■■■……せっかく笑顔で別れられ、る、と思っ、たのに――――」

少女の顔があの複雑な笑顔を徐々に崩れてゆく。そして涙を一筋流すと彼のぬくもりを忘れないようにときつく抱き締めた。

暫くの静寂――――

そして少女は不意に彼の体を優しく押しのけた。もうその顔に涙は無く、あるのは心のそこからの笑顔だった。それに答えるかのように少年も微笑んだ。その二人は太陽の光と周りの風景も相俟って一つの絵画のように美しかった。

「ありがとう。貴方の言葉を胸に、私は、あの丘から先に進みます」

今まで止まっていた時が急速に流れ出すかのように少女の体は薄れてゆく。しかし、二人の顔に悲しさはない。

少年は誇らしげな表情で一言。

「またな、セイバー」

それに優しく微笑みながら言葉を返す。

「ええ、また合いましょう、マスター」

そして本当の最後の言葉。

「貴方の行く先に、光と希望があらんことを――――」

そう言って彼女は消えた。そこで少年はいなくなった彼女の姿を焼き付けるように一瞬瞳を閉じると、少女のいた場所をもう一度見てもういない少女に向かって小さく呟いた。

――――ああ、またな

急速に体が覚醒してゆくのが分かる。ああ、私は起き――――

「ルイズ、何故泣いているのですか？」

「あれ、私泣いてるの？」

私のベッドの横で佇む自分の使い魔に言われて自分が泣いていることに気がついた。そして、彼の心配そうな瞳を見て気がつく。ああ、そうか……さっきまで見ていた夢の少年は彼なんだと。

「あなた、なんて……」

なんて切ない……そこまで考えてその考えを止める。本気で人を愛したことのない私にどうこう言える資格はないのだ。

「何でしょう？」

「いえ、なんでもないわ。昨日言っといたでしょ？　さっさと洗濯

してきなさい！」

「？？？　分かりました。行って参ります」

不思議そうな顔で部屋を出て行った彼を見送りながら思う。

――――いつか、笑顔で彼女を送り出せた彼の気持ちが私にも分かる時がくるのだろうか……？

第二話『どうやら物語が始まるようです』（後書き）

勘違いの仕方が結構強引ですね……（汗
上手く書けない自分の力量に若干落ち込んでます。
ですがこれからも頑張るので、感想等をくださると気分が上がるのでどしどしお願いします。
では、また会いましょう～。

第三話『勘違いが広がってゆくようです』（前書き）

今回はあまり出来に自信が有りません。でも酷評は……どうかお許しください（汗

第三話『勘違いが広がってゆくようです』

何かナルシストがいるよ。薔薇とか……ぷぷっ。

背景父上、イギリス人は変な人が多いです（笑

第三話『勘違いが広がってゆくようです』

［Ｓｉｄｅ：アルト］

俺はいまだ何処とも知れない広場を彷徨っていた。時計が無いので正確なところは分からないが多分三時間以上は迷っていたのではないだろうか？　下着を持ってコスプレした男……はい、アウトー！　完ッ壁に通報されますね。広すぎるこの学校がいけないんだよ！　クソが！

ほら！　あそこの黒髪のメイドさんもなにやら汚らわしいものを似るような目でこっち見てるし！　っちょ、こっち来たよ。どどどどうしようティガー！？　僕もついに社会不適合者の烙印を――――

「どうかなさいましたか？」

……っへ？　え、笑顔？　君は――――

「警察に突き出すつもりではないのですか？」

「警察って何でしょう？」

ってか、また口に出てたし。しかも、律儀にセイバー口調…今更後に引けなくなってセイバーっぽい口調を続けているんだけど、口が緩いのってそのせい？　……もしかして俺って独り言多いタイプなのかな……。

それよりも、警察は警察でしょう。何故知らないんだろう。

「？？？　何か私の顔についてますか？」

うーむ、どうやら彼女は本気で警察が分かっていないらしい。そんな馬鹿な……と唖然としていたらここである仮説をひらめいた。

まさか……！　彼女は何処かの超大金持ちのお嬢様なのでは！？

それなら箱入り娘過ぎて警察を知らないというのも辻褄が合う。というか警察をマジで知らない一般人ならドン引きものだ。

きっと何か特別な理由があって身分を大っぴらに出来ないからこんなところでメイドの振りなんかしているんだろう、可哀想に……。何か共感がわくな、不幸な者同士的な意味で。

ちゃんと励ましてあげよう。

「大変だとは思いますが諦めないでください。何か（掃除のことと

かで）困ったことが起こったら私に言いなさい。微力ながら力を貸しましょう。」

「は、はい。ありがとうございます」

うーむ、意味不明なこと行ったせいでちょっとひいてしまったかな？　おっと、せっかく親切な人に出会ったんだから洗う場所を聞いとこう。

「その代わりといってはなんですが、一つ聞きたい事があるのですが」

相手はお嬢様だ、失礼の無い内容にしないと文字通り首が飛びかねないからな。丁寧に話さないと。

と、ここでまたしても俺の頭に神の啓示が聞こえた。

……っは！　まてよ、よく考えてみれば大金持ちの一人娘（勝手に断定）を一人でこんなところにいさせるはずが無い。もしかして何処からか俺らを監視しているんじゃ――――

ふと俺はそう考えてキッと睨みながら後ろを振り向いた。

しかし誰もいないなぁ、草と木しか見えん。まぁでも素人の俺に見つかる監視役なんているはずないか。

「どうかしましたか？」

暫く目を凝らしていたがメイドさんが不思議そうな声で訪ねたので探すのを止め、メイドさんに視線を戻した。

すると、そこに待っていたのはメイドさんの穢れを知らない無垢な瞳だった。

い……痛すぎる、なんて目で見てくるんだ！　クッ、そんな目で見られたら監視役がいるかと思って格好つけて振り向いたけど、結局何処にいたのか分からなかったなんて格好悪くてとてもじゃないけど言えないじゃないか！

……しょうがないここは何か意味深なことを言って誤魔化しておこう。

「いえ、なにやら視線を感じたものですから……敵意は無いようですので今は捨て置きますが……もし後で何か聞かれたら、こう忠告してあげてください。私を敵に回したくないのであれば尾行するのはやめておきなさい、誠意を見せて頼むならば貴方の大切な人を救う事に助力しましょう、と」

「???　は、はぁ、わかりました。そのように伝えます」

計・画・通・り。

何言っちゃってるのこの人的な顔をしているぜフフッ。おっといつの間にかどこかのキラさんのような笑みがつい出てしまったようだ。

ん?　メイドさんが顔を若干引き攣らせてるな、これぐらいにしておこう。

「ところで、先ほどの続きですが」

「は、はい！」

何か声が裏返ってるけど大丈夫かな？　まぁ、そんな無礼なことを言って消されたら（暗殺的な意味で）洒落になんないから言わないけど。

「マスターから洗濯せよとの命を受けてここまで来たのですが、何しろ私は召喚されたばかりの身。洗い場の場所が分からず迷っていたのです。場所を教えていただきたい」

「あ、洗い場、ですか？　わ、分かりました、私についてきてください」

「感謝します」

本当にいい子だなぁ。俺が拉致された身の上でなければ彼女に告白していたかも知れんな。

そんな事を思いつつ、シエスタちゃんについて暫く歩いていると、なにやら無駄に金がかかってそうな洗い場に来た。

「ここが洗い場です」

「助かりました」

「いえ、そんな……」

ふむ、ところでこのメイドさんは何故さっきから緊張したような表情になってるんだろう？　今頃俺が危ない人だと気づき警戒して

るのだろうか？　そうだよな……こんな何処の誰かも分からないコスプレ下着泥棒っぽい奴を警戒しない方がおかしいか。うん、ここは、彼女が去ってしまう前に自己紹介でもして不審者じゃないって弁解しておかなくちゃ。

「……では、私は仕事が有りま――――」

「ルキウス・アルトリウス・カストゥス」

別れの言葉を言おうとする彼女を遮り俺は無理矢理自己紹介をした。

「えっ？　何ですか？」

シエスタちゃんは何を言われたのか分からないのかキョトンとしている。が、そんなことは今はどうでもいい、不審者でないことをアピールしておかなくては。

「私の名前です。気軽にアルトと呼んでください。貴方の名前を聞いても良いでしょうか？」

「わ、私の名前ですか？　シ、シエスタです」

うむ、不審者に対してもこの礼儀正しさ……感動したっ。ルイズもそうだけど、イギリスの女性は皆親切なのか？　まぁ、ルイズは口は悪いが。

しかし、男は変な奴ばっかだな。今まですれ違ったりした時に見かけた、コッパゲとか、薔薇持った変態とか、チビデブとか……あと俺とか。不本意だけど客観的に見た結果、俺も変な人なんだよな。なんたって他人からはきっと、『コスプレ下着泥棒』と思われてい

るんだろうし。今年ぁ……厄年かな……ははっ……。

でも、唯一の救いが女性陣は皆まともだって事だな。この子なんてまさに理想のお嫁さんって感じだからな。まぁ、口には出さないけど

「シエスタは将来、お手本のような素晴らしいお嫁さんになるのでしょうね」

なのに気づいたらこんなことを口走ってた。何故に！？　俺の口は何故にこんなに緩過ぎるんだー！　我ながら恥ずかしすぎる……。

「い、いえそんな……」

お？　意外とまんざらじゃない顔してるぞ。俺はてっきり「はぁ？　うわ、キモッマジ近寄らないでくんない！？」とか言われてしまうかと思っていたんだが。何かモジモジしてて可愛いなぁ……めっさ癒されるわぁ～。

よしもうちょっとからかって———

「わわわ、私……し失礼します！」

あら、行っちゃった。純情そうなシエスタちゃんには刺激が強かったかな、やれやれ。

さーてとさっさと洗濯終わらせて飯を貰いに行こっと。

［Ｓｉｄｅ：タバサ］

私は今、ルイズが召喚した使い魔を追っていた。

ミスタ・コルベールを一瞬で取り押さえ、絶対当たると確信した完璧な不意打ちの『ウィンディ・アイシクル』を見もせず軽々と避けたあの動き。圧倒的な神秘性と絶対的な威圧感を備えた、まるでイーヴァルディの勇者のような彼に私は少しばかりの期待をした。

———もしかして彼は私を助けてくれるために来たのではないか？

でも結局それは私の妄想でしかなく、私になど見向きもせずルイズに自ら服従した。

落胆した。今更他人に頼ろうとしている自分に落胆したのだ。結局の所は自分で何とかするしかないと、そう思っていたのに。

———なら、何で私は彼を追いかけているの？

そんな答えの出ない疑問に不安を覚えながら、隠れて彼を監視していた。

彼は、もうかれこれ三時間ほど何をするでもなく歩き回っていた。周りに鋭い目線を向けていたことから何かに警戒しているのだろうか。

———もしかして私の気配に気づいている？

いや、ここからは軽く三百メイル以上の距離がある、それは無いだろう。私は遠見の魔法を使っているから見えるが、何の魔法も使わず、周りの草木に隠れている私を見つけられるはずがない。そう自分に言い聞かせて、彼の監視を続ける。

すぐにそれが間違いだったと気づくというのに――――

暫く監視を続けていると、なにやらメイドが近寄って、そして何かを話し出した。私はメイドが陰になって見難かったので、ほんの少し横にずれた。その時、一瞬だけ、ほんの一瞬。一秒にも満たないその僅かな時間、私は気を抜いた。絶対に見つからないという慢心があったのは認めよう。でも、普通は見つかるはずが無いのだ。それなのに彼は、その少しの気の緩みで私を見つけ――――

「！？」

凄まじい威圧感の篭った眼差しで睨んでいた。

体が一瞬にして硬直する。

――――そんなまさか、ありえない。いくら彼が凄かろうと、魔法も使えないはずの彼に私が見えるはずが無い。

そう自分に言い聞かせるが所詮は唯の逃避に過ぎないのはわかっていた。完全に私と目が合っているのだから、気づいていないはずが無いのだ。杖を握る右手はじっとりと汗がにじみ、額からも冷たい雫が浮き出てくる。まさに蛇に睨まれた蛙。

――――殺される！

そんな本能的な恐怖が体の内から沸き起こり体が震えだす。意識が遠くなってゆく。

――――もう……

駄目だ、そう思った時、不意に今まで私にのしかかっていた巨大な圧力は消え去った。何事かと思って改めて彼に目を向けると彼はもうこちらを見てはいなかった。敵足り得ないと判断したのだろう。そして彼はメイドになにやら呟いた後二人でその場を立ち去っていった。

途端に私は全身から力が抜けその場にへたり込んでしまった。心臓が破裂しそうな勢いでドクドクと波打っている。

だけど、未だに信じられなかった。自分はこれでもいろんな危険を掻い潜ってきた。戦場では気配を殺さないことは直接の死につながる。だから私はそこら辺のメイジには真似出来ないほど気配を消すのが得意だ。

――――本当に彼は気づいていたのだろうか？　偶然こちらを見ていただけではないのか？

少し考えればそんなの有り得ない、彼は完全に気づいていたと分かるそんな事を、これまでに無いほど混乱した頭では理解できなかった私は――――

「メイド」

そう、あのメイドに尋ねれば分かることだ、とそんな短絡的な考えで私はあのメイドを探す事にした。

暫く探すとメイドはすぐに見つかった。私は焦る気持ちを抑えてメイドの前に立つ。しかし、なかなか言葉が出ない。聞きたいことは山ほどあるのにどういえばいいか分からない。これほど自分の口下手に怒りを感じたことは無いだろう。

そんな状況が暫く続き、どう訪ねようかと考えていたら彼女の方から困惑気味に訊ねてきた。

「えっと、何か御用でしょうか？」

これは幸いだ。今彼のことをかなければ二度と聞けないだろう。いろいろ言いたい言葉を吟味し最小限の言葉で先ほどのことを訊ねる。

「彼……何て？」

そんな、分かりずらい言い方で伝わるか不安だったが、どうやら伝わったらしい。驚いた表情でこんなことを言い出した。

「まさか本当に来るなんて……」

「……」

聞き捨てなら無い言葉だ。まるで私が来ることを知っていたような口振りだ。まさかと思う気持ちを抑えつつ、言葉を返す。

「……何の話？」

多少不機嫌になっていたのかもしれない。少し強めの語気にメイ

ドは謝りながら訳を話した。

「え、えっと、アルト様は、後で私の所に話を聞きに来るだろうから忠告を頼む、と言われまして……」

ま、さか――――

「……なんて？」

「えっと、私を敵に回したくないのであれば尾行するのはやめておきなさい、誠意を見せて頼むならば貴方の大切な人を救う事に助力しましょう、と……」

「！？　……そう」

やはり彼には気づかれていたのか……。でも、今はそんなことよりも最後の『誠意を見せて頼むならば貴方の大切な人を救う事に助力しましょう』という言葉が問題だ。

――――彼は知っている！？

いや、知っているのは確実だろう。私の母が病に犯され、今も尚、囚われのの身であること、そして私自身もガリア王の駒にされていることも、全て知っているのだろう。知らないならばそんなことは出てくるはずが無いのだから。

私は心の奥底から喜びが湧き上がってくるのを感じた。今まで誰にも話すことが出来なかった、私の思いを彼なら聞いてくれる。そして『救ってくれる』のだと思うと自分の感情が抑えきれなくなってくる。

「ど、どうしたんですか！？　わ、私、何か粗相をしましたでしょうか？」

「何の事」

「だって、泣いておられますから……」

「？」

彼女に言われて初めて気がついた。

――――私、泣いてる？

母が病に犯され、絶対に治して見せると決意してからもう二度と泣かないと決意した私が？

――――でも、心地良い……

こんな心地良い涙は初めてだ。

「貴方は悪くない」

それだけ言って、未だ混乱しているメイドと別れると今度は彼を探しに歩き出した。この一歩は私にとって大きな一歩になるだろう。彼に認められるためにも誠意を見せに行こう。

母の笑顔のために――――

第三話『勘違いが広がってゆくようです』（後書き）

いやー、タバサは難しい。普段しゃべらないキャラのせいでタバサ始点にして心の内を出そうとすると違和感ＭＡＸ！
どうにかしようと頑張ったのですが、私の力量ではこれが限界でした。自分としてはタバサは結構好きなキャラなので書きたいのですが、実力がそうはさせまいと足を引っ張っています（汗
次話はギーシュ戦を予定しております。第四話はもっとうまく書けるように頑張りますので、どうか応援よろしくお願いします。
では、また合いましょう。

第四話『変態ナルシストに絡まれたようです』（前編）（前書き）

ギーシュ戦は、何か凄く長くなってしまったので前編、後編に分けました。それでもいつもの1，5倍ほどの文量があるのでご注意ください。

第四話『変態ナルシストに絡まれたようです』（前編）

世の中思ったとおりに行かないものですね。

何か薔薇持った変態に絡まれてしまいましたよ、やれやれ。

第四話『変態ナルシストに絡まれたようです』（前編）

［Ｓｉｄｅ：アルト］

俺は何処とも知れない広場で突っ立っていた。

目の前には動揺した様子のナルシストと涙目で走り去って行く下級生らしき少女。そして、怒りまくった金髪縦ロール？　の少女がいる、という何とも修羅場な状況だった。

金髪の縦ロール髪をした女の子はプルプルと震えていた。

「モンモランシー？」

ナルシストが機嫌を窺うように金髪縦ロールの子の名前を呼ぶが、彼女は全くの無視。その重い空気が暫く続くと、縦ロールの子が不意にテーブルのワインを掴んだ。

そしてそのワインをナルシストの頭に持っていくと———

「うそつき！」

ワインをドボドボとかけ、そう怒鳴りながら去っていった。

流れる気まずい沈黙。

「あのレディ達は、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

そんな沈黙に耐えられなくなったのかそんな事を大仰な身振りを付けて言った。そしてナルシストはハンカチを取り出すと、頭を拭きながら怒りの目線をシエスタちゃんに向けた。

「君が軽率に、香水のビンなんか拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「も、申し訳ありません」

さて、なんでこんなことになっているかを説明すると、二股してたナルシストが香水を落としてしまった。それは縦ロール髪の子がプレゼントしたものだったらしく、それを親切心から拾ったシエスタのせいで浮気がばれた、ということらしい。

八つ当たりもいいとこだ、最低男の見本だな。まぁ、そんな見本いらないけど。

「誤って済む問題ではないのだよ、君。それとも君が責任を取ってくれるとでも言うのかね！？」

「申し訳……ありま…せん」

やっと洗濯が終わって、お礼を改めてしようといろんな人に聞きながらたどり着いたって言うのに……せっかくの暖かい気持ちがこのアホのせいで途端に嫌な気持ちに早変わりだよ。

……豆腐の角にでも当たってコロッと死なないかな？

「何と愚かな……幼気な少女に責任を擦り付けるとは。一紳士として恥ずかしくは無いのですか？」

気づいたらそんな事を口走っていた。

ヤバッと思ったが、もう後の祭り、次の瞬間にはナルシストの鋭い目線は俺に向いていた。

「何だね君は？　まさか僕にたてつくつもりかい？　この元帥を父に持つ、名門・グラモン伯爵家のギーシュ・ド・グラモンに！」

うわ、コイツめんどくさ……俺に話を振るなよと思った俺だったが、シエスタちゃんの縋る様な目線に今更何でもありません、なんて空気の読めないことは出来ない。俺は空気の読める男。略して『ＫＹ』なんだから！

……あれ？　おかしいな……なんで『ＫＹ』になってるんだ？

「何か言ったらどうなんだね？　それとも怯えて声も出せないのかね？」

どうしよう、もう今更だし、どうせなら格好良く決めたいよなぁ、周りには女の子もいっぱいいるし。特にシエスタちゃん。そういえばシエスタちゃんで思い出したけど、このナルシストはシエスタちゃんがお嬢様の令嬢だって事に気づいているのだろうか？　あんな事続けてたら消される所だったんだぞ。感謝して欲しいくらいなんだが。

「ふっ……所詮はゼロのルイズの使い魔か。蛙の子は蛙ということだな」

ナルシストのその言葉と共に辺りに爆笑が巻き起こった。何が面白いんだろう？　蛙の子は蛙？　どういう意味だ？　俺はあんま頭が良くないからそんなことわざ使われても分からないんだけど。

「何がおかしい？」

取り合えず訊ねてみたけど、人類の敵のような男に勿論敬語など使わない。すると俺の言い方が気に入らなかったのか怒りの表情で――――

「クッ……本当に話の聞き方のなっていない奴だな、いいだろう。そこまで僕にたてつくというなら……決闘だ！」

なんて言いやがりました。

ってか、ケットウ？　血糖値でも気になるのだろうか。

そう疑問に思って奴を眺めていたら、ヒッ！　と一瞬悲鳴を上げて後ろに後退った。

？？？　何してんの？　悲鳴を上げるほど面白いものが後ろに何かあるのか？　もしかしてさっき皆が爆笑してたのはこいつの言葉ではなく、後ろにある何かだったのか？

そう思って後ろを向いた。が、……何も無い、それとも俺には分からない位置に有るのだろうか？　そう思って俺は後ろにいるナルシストに向かって再度訊ねる。

「何をしているのです。さっさと（何がおかしいのか）教えていただきたいのだが？」

「こ、この……今更誤っても遅いからな。こっちだ、ついてこい平民！」

するとナルシストがそう言って歩き出した。ところで、ヘイミンって何？　俺って使い魔じゃないの？

「私は……平民などという名前ではない。ルイズの使い魔――――セイバーのサーヴァント『アルトリウス』だ。貴様に平民などと呼ばれる筋合いは無い」

「！？　ふんっ……そんな事を言っていられるのも今の内だ」

ちょっと格好つけて見た。どうかなシエスタちゃんの反応は？　そう思って後ろにいるシエスタに振り返る。

「アルトさん……」

するとシエスタちゃんは予想外の表情だった。

何故そんな悲しげな顔してるのですかい？　分かったぞ、俺と離れるのが嫌なのだろう？　ふふ、困ったメイドさんだ。

と冗談は置いといて、きっとさっきまで怒っていたナルシストと俺が何処かに行こうとしてるから心配なのだろう。でも安心しろシエスタちゃん、俺はただ面白いものを見せてもらいに行ってくるだけだ。喧嘩とかにはならないから。

「あん、な、口約、束……守らなく、てもいいん、ですよ？」

あの……何故か涙を流してるんですが。……もしかして俺が泣かしたの？　クッ、周りの視線がハートにグサリとくるぜ。仕方が無い……ここは取り合えず泣き止ませないと！

「心配は無用です。私のこの剣に誓って約束は果たします」

「はぃ……でも、無茶なことだけはしないでください……」

うん、自分でも何の約束か分からないけど取り合えず泣き止んだようだからいいか。

「おい！　何してるヴェストリの広場はこっちだぞ！　もたもたするな！」

うっせーな、ちょっとは空気読めよ変態ナルシスト。まぁ、でも奴の言う事にも一理あるか。自分から聞いといていざ教えようとしたら聞く気が無いんじゃ苛々するのも頷けるもんな。

「まったく……少しは待てないのですか貴方は」

ま、でも誤らないけどな。

「クッ！　平民風情が！」

……あっ、そういえば――――

「……シエスタ一つ頼みがあります、ルイズを呼んできていただきたい」

「……ミス・ヴァリエールですか？　……分かりました、任せてください」

ここにルイズが居ないことを思い出してシエスタにそう言う。あれだけ皆爆笑するんだ、さぞ面白いことに違いない。それをルイズが見れないのは可哀想だ。これからもお世話になるんだし今のうちに恩を返しといて損は無いからな。

「では頼みましたよ」

「はい！」

うむ、いい返事だ。さてと、俺は面白い物とやらを見に行こう。

［Ｓｉｄｅ：シエスタ］

私は今、全力で走っていた。

というのも、私を助けてくれたアルトさんがミス・ヴァリエールをつれてきて欲しいといったからだ。彼女が来ても事態は収まらないと思うがアルトさんには何か策があるのだろう。そう思い、今全力でミス・ヴァリエールを探しているのだ。

彼と会ったのはつい先ほど。何か険しい表情で佇んでいたので声をかけてみた。彼がミス・ヴァリエールが召喚した平民の使い魔だということは知っていたので気軽に尋ねてみたのだ。

でも彼は私たちとは少し……いや、全然違った。鋭い眼光に、威厳を感じさせる言葉遣い、そしてこの学校にいる貴族達よりもよっぽど貴族然とした立ち振る舞い。

私とは世界の違う人物なのだと知った。それに気づいてからは体が緊張して上手くしゃべれなくなっていたと思う。そんな私に彼は優しく微笑んでくれた。そして彼と交わした簡単な約束。それは日常でも良くある決まり文句、所謂『社交辞令』だ。でも彼はそんな約束を――――

私が些細な思い違いからしてしまった間違い。貴族相手に失礼を働いた私は、もうここで働けないのかと絶望の淵に立たされていた。

そんな時彼は何処からともなく現れ、まるでイーヴァルディの勇者のように私を守ってくれた。約束を果たすため、ただそれだけのために自らの危険も省みず私を助けてくれたのだ。

『大変だとは思いますが諦めないでください。何か困ったことが起こったら私に言いなさい。微力ながら力を貸しましょう』

あんな何気ない約束の為に――――

だから私は走っている。この恩に報いるために――――

［Ｓｉｄｅ：ルイズ］

私は一人図書室で調べ物をしていた。勿論私の使い魔についてだ。彼の言っていた言葉。そのどれもがいちいち頭の片隅に引っかかるのだ。

『サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上した。問おう……貴方が私のマスターか？』

サーヴァント・セイバー？　剣の使い魔ということ？

『ルキウス・アルトリウス・カストゥス』

そしてこの言葉……これにも、アルビオンについて書かれている本か何かで気覚えがあった。

だから私は、本当は入ってはいけない『フェニアのライブラリー』にこっそり忍び込んで彼について調べていた。一般生徒用の図書室には私の納得いく物が無かったからである。そこでたまたま開いた『アルビオン伝承～ケルト神話～』。そこには驚くべき事が書かれていた。

――――こ、これって……！

私は内心の動揺を抑えながら静かに図書室から抜け出した。そして頭の中に渦巻く色々な情報を整理しながら自分の部屋に向かって歩いていく。これが本当なら私はとんでもない使い魔を呼び出したことになる。

だが信じられない。何千年も昔の、始祖ブリミルが生まれるよりも昔の神話に出てくる英雄が、生きて此処にいて、しかも私の使い魔だなんて。

――――何馬鹿な事を妄想してるのかしら私は。

そんな事を考えていた時、不意に名前を呼ばれた。

「ミス・ヴァリエール！」

「ん？」

「あの、あああの！」

「何の用？　取り合えず一回深呼吸して落ち着きなさいよ」

私の名を呼んだのは黒髪のメイドだった。息を切らしながら切羽詰った表情で何かを伝えようとする彼女を取り合えず落ち着かせ、話をさせた。

「ア、ルト様がギーシュ様と決闘を――――」

「なな」

「七？」

「ななんですってぇ！？」

どういうことだ？　何でそんなことになっている。私の知っている彼は礼儀正しく温厚だ。確かに最初はコルベール先生に襲い掛かったけど、いつでも殺せる状況にあった彼を無傷で解放したし、攻撃したタバサにも何もしなかった。そんな彼が決闘だって？　信じられない。

「何でそんなことに？」

「実は――――」

メイドは事のあらましを決闘の場所ヴェストリの広場に向かいながら簡単に説明してくれた。

「そうだったの……でも何故アルトは私を？」

「それが……よく分からないんです。私はただミス・ヴァリエールをつれてくるようにとしか言われてなくて……」

どういうことだろう？　でも、そんなことを考えるより今はこんな馬鹿げた事を止めさせることに専念しなくては。多分きっと彼も私に止めることに期待しているから呼んだんだろう。そう勝手に自己解決して広場に向かった私は驚愕した。

「ア、アルト！？」

ギーシュのワルキューレに棒立ちで殴られているアルトがいたからだ。

――――そんな……自信が有るから喧嘩を買ったんじゃないの！？　何でそんなボロボロになってるのよ！

私の頭は全く混乱していた。彼はどこか人間離れしていた。だからこそ所詮ドットメイジのギーシュぐらい相手にならないと思っていたのだ。むしろギーシュが危ないと思っていた。

なのに、なのに目の前のアルトは――――

「ぐはっ！」

そんないかにも痛々しげな声と共にアルトが私のほうに殴り飛ばされてきた。私はすぐに駆け寄ってアルトの体を起こした。

「アルト！　何でこんなことに……」

私が彼の心配をしていると離れた所に立っているギーシュが馬鹿にした声で話しかけてきた。

「おいおい、『ゼロ』のルイズ、邪魔しないでくれるかな？　僕は今、そこの平民と決闘中なんだがね？」

「あ、あんた……こんなこともうやめなさいよ！　大体、決闘は禁止じゃない！」

「決闘を禁止されているのは貴族同士の決闘だけだよ、貴族と平民

の決闘なんて誰も禁止していない」

その言葉に上手い返し言葉が見つからない。

「そ、それは、今までこんなことが無かったから……」

「ふん、そんな事僕には関係ないね。さ、退きたまえ、まだ決闘は終わっていないんだからね」

「あ、あんたって奴は……」

額から血を流しながらゆらゆらと立ち上がろうとする彼を見つめながら思う。何で？　コルベール先生やタバサの時の動きはどうしたの？

あの時と一体何が違うって———

「思い出して」

「え？」

不意に言葉をかけてきたのはタバサだった。こういうことに興味を見せない彼女が此処にいることも驚きだが、普段めったにしゃべらない彼女が大して親しくも無い私に自分から離しかけてきたことに驚いた。

「彼の事」

「アルトの事……？」

――何が違う？　彼を召喚した時の戦闘と今の決闘と何が違う？　そして彼はなんて言っていた？

私が考え込んでいる今この時もアルトは、ギーシュに立ち向かわんと体を起き上がらせようとしている。

そのとき不意に彼の額から垂れた血が、私のほうに飛んできて頬についた。

――血……？

それを手で拭って、私は思い出した。

『血が……ルイズの血が欲しいのです』

そうだ、何故あの時血を欲しがった？　全力を出せないからだと、そう言っていたはずだ。でも、戦闘終了後でもかまわないと……まて、『戦闘終了後』？　では、あのコルベール先生やタバサの時は戦闘ではなかったの？

そして自分の先ほどの思考を思い出す――

『彼を召喚した時の戦闘と今の決闘と何が違う？』

そう、あの時召喚した時、あれはまさに『戦闘』だった。

何故今まで気づかなかったんだ。今考えれば、何故アルトはあのタイミングで血が欲しいなんて言ったんだろう？　そして何故アルトは私を呼んできて欲しいなんてメイドに頼んだのか。

その時頭の中でバラバラだったパズルのピースが形を現した。

そう――

答えはつまり――

――召喚した時の戦闘の後、力を枯渇させていた？

「アルト！」

もう既に立ち上がり、今まさに立ち向かわんとしている彼をこちらに向けさせる。

――これはしょうがないのよルイズ。しなければ彼が死んでしまうんだから！

そう自分に言い聞かせる。

勿論指を切ったりするためのナイフは無い。それに誰か持っていたとしても借りている間にアルトがやられてしまうかもしれない。状況は刻一刻を争うのだ。

私は歯で唇を少し噛み切った。

――痛い、でもアルトはもっと辛い筈なんだから！

彼の肩を掴む。そして――

「「！？」」

周りの驚きの声が聞こえるがそんなことは気にしない。なるべく切り口が接触するようにキスをする。傷口がひりひりする。それにこれ以上に泣く恥ずかしい。コントラクト・サーヴァントの時は契約のためと皆分かっていたからいいが、今のキスを他人から見たらどうだろうか？　何の脈絡もなく私が彼にキスをしているように思うのだろう。そう思うと途端に恥ずかしさが増してゆく。

――――も、もういいわよね。

唇からの僅かな量だが結構吸わせたし、もういいだろうと自己完結して唇を離した。案の定、皆呆然としてこちらを眺めていた。私はその恥ずかしさを紛らわせるために彼に言葉をかける。

「これでいいわよね？」

私のその言葉に言葉は返ってこなかったが頷いたように見えた。

「さ、その剣でギーシュなんかやっつけちゃいなさい！」

そう言って送り出す。すると彼は剣を腰から抜きながらこんな言葉を返してきた。

「マスター……」

「な、なによ」

「別に……殺してしまっても構わないのでしょう？」

ぞくっとするような冷徹な瞳で――――

「ちょ、あんた何を――――」

聞き返そうとしようとしている所にタイミング悪くギーシュが割って入ってきた。

「いい加減にしたまえよ？　僕を馬鹿にしているのかい？　さっさとやられたまえよ、平民」

そう言って一体のワルキューレをアルトにけしかける。

――――馬鹿、今アルトに何かしたら！

ワルキューレがアルトに殴りかかる。当たると確信したのだろうギーシュの顔がいやらしく歪む。

しかし――――

ギーシュのワルキューレがアルトに触れることは無かった――――

「な、何！？」

周りがどよめきで埋め尽くされる。それもそのはず、彼は何も持っていない手でギーシュのワルキューレを『切り裂いた』のだから。

……まて、さっき抜いた筈の剣は何処に行った？　抜いた瞬間には確かに黄金に輝く両刃の剣を持っていたのに――――

そんな事を考えている間に状況は一気に変わっていた。何回出しても一刀のもとに不可視の何かで切り倒されていくワルキューレ。そんな状況、そしてアルトのまるで虫けらでも見るかのような冷徹な瞳に恐怖が巻き起こったのだろう。ついに切り札のワルキューレ

の七体同時錬金をした。

「ふ、ふんいくら君でも7対同時には戦えまい！」

ギーシュが顔を引き攣らせながらも勝ち誇ったように言う。そして七体のワルキューレたちがアルトに襲い掛かった。

だが――――

彼の一言によってギーシュの余裕は一瞬にして崩された――――

「風よ――――」

彼の持っている不可視の何かに肉眼でも確認できるほどに高密度の空気の渦が逆巻いてゆく。そしてその巨大な風を纏ったそれを下段に構えると――――

一気に振り上げた――――

「――――吼え上がれ！」

――――爆風

そんな形容が最も当てはまるような竜巻が巻き起こり、七体のワルキューレを一瞬にして粉々にした。

そして、その勢いは止まることを知らずギーシュに襲いかかる。

――――このままじゃ！

私の脳裏に彼の言葉が甦る。

『別に……殺してしまっても構わないのでしょう？』

背筋が凍る。

———アルトは本気だ！　止めなきゃ！

「アルト！　殺さないで！」

私の言葉が聞こえたのだろうか？　風は不自然な軌道でギーシュを避けると学院の壁に大きな穴を開けるとようやく治まった。

「はは、は」

ギーシュはあまりのことに腰を抜かしているのか、乾いた笑いをするだけで起き上がることが出来ない。そんなギーシュにアルトが近寄ってゆく。まさか？　と思ったがもう彼の目にあの残酷な色は無く、ただあるのは、興味のなさそうな無関心な瞳だけだった。

「侮ったな。私の二つ名はブリテンの赤き竜。魔力の封印のせいで普段は貴様に劣るが、魔力さえ満ちているのなら貴様如きに劣る事はない」

「ま、まいった……」

ギーシュの敗北宣言の後一瞬にして周りは驚きと興奮の渦によって荒れ狂った。

「運が良かったですね、貴族の少年。だが、次は無いという事を確

と胸に刻みつけておきなさい」

そんな喧騒の中で彼は、私とギーシュ、近くにいる者達にのみ聞こえる程度の小さな声でそう言うと、不可視の何かを鞘に収め、そしてもう興味はないとばかりに視線を外すと騒いでいる集団から出て行った。

「――なんて強さ、もしかしてアルト、貴方は本当に……？」

私の疑問は虚しく周りの喧騒に消され、彼には届くことは無かった。

――いつか彼は、私に自分が何者なのか語ってくれるだろうか？

そんな淡い希望を胸に秘めながら私は、彼の後姿を眺め続けていた。

第四話『変態ナルシストに絡まれたようです』（前編）（後書き）

ギーシュの扱い酷いかな？　まぁ、でも彼はそういう役どころだと作者は思っているのでこれでいいと思ってますが。

さて、今回の前編ではギーシュ戦はルイズ視点でしたが、次はアルト視点です。　一体彼は何故、風王鉄槌（ストライクエア）を使えたのか？　その謎が分かります。多分ですが……（汗　あ、後それと一つ聞きたいのですがオリキャラは入れてもいいんでしょうか？　何か作品のバランスが悪くなるような気がして怖いのですが一応考えてはいます。

もし良かったら感想などのついでに意見をもらえると幸いです。

意見、感想、誤字脱字の報告など待っていますのでよろしくお願いいたします。　では、また合いましょうノシ

第四話『変態ナルシストに絡まれたようです』（後編）

ナルシストって小説や漫画なら許せるけど、実際いるとドン引きだよね。

※注意、ナルシストはプライドの塊です。餌（挑発）を与えないでください。

第四話『変態ナルシストに絡まれたようです』（後編）

俺は今、ヴェストリの広場という所にいた。あのナルシスト……ギーシュとやらが面白いものを見せてくれるというから来てみたのだ。

で、たどり着いたのはいいんだが、何時になったら教えてくれるんだろう。お互いに向き合って何もしないまま、もう二分は過ぎている。一体どんな面白いことなんだろう。

「（面白いものを）早く見せていただきたいのだが、何時になったら（面白いことが）始まるのですか？」

取り合えず催促してみた。するとギーシュは何故か顔を真っ赤にして怒りながら薔薇を俺に向けた。

「ふん！　そんなに（魔法を）見たいなら見せてあげよう、僕のワルキューレをね！」

そんな事をギーシュは叫ぶと、薔薇の花を振った。そして花びらが一枚、宙に舞ったかと思うと、そこには青銅の体の女戦士が佇んでいた。

……コイツ服装や喋り方もだけど、マジックまで趣味が悪いのかよ。あれで何で女の子にモテるのかさっぱり分からない。

……いや、分かっているさ。顔だろう？　顔なんだろう！？　イケメンなんて絶滅するといいさ！

「僕はメイジだ、だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

スゲーな最近のマジシャンって。マジックで敵と戦えるらしい。つまりマジックで戦うって事は、あの、ワ、ワレキュ……銅像で戦うって事だろう。どうやって戦うんだろうか。

ってかそもそも何で戦うの？　誰と戦うの？

「ほう？　貴方は魔法（マジック）で戦えるのですか。驚きました」

俺は率直な意見をギーシュに向かって言った。

純粋に驚きだからな、マジックを戦いに用いるなんて。なのにせっかく褒めたのにギーシュはさらに怒って馬鹿にするなと怒鳴ってるし、周りも、ギーシュ舐められてるぞ！　とか言って騒いでる。……はて？

ところで、何故マジックを戦闘なんかに用いるんだろう？　単純に人を殺める目的なら銃を使った方が効率が良いのに……。

と、ここで、またしても俺の頭に仮説が浮かんだ。

……まさか、この学校はマジシャン養成学校ではない？

という事は――――

そうか分かったぞ……俺がマジシャン養成学校だと勝手に勘違いしていただけで、実はマジックでカモフラージュして暗殺するアサシン養成学校だったんだな？

そうだ、そうに違いない。

冷静に考えてみたら俺が今までに見たマジックで純粋に人を楽しませるマジックは無かった。

赤毛の女の、火の玉を飛ばすマジック。青髪のランサーっぽい子の、鋭い氷柱を撃ちだすマジック。ルイズの、どんなものでも爆破させるマジック。

どのマジックを見ても、証拠を残さず殺すには使い勝手が良いと言える。火は焼き殺した後勝手に消えるし爆発もそう、氷柱も溶けてなくなるので凶器は二度と発見されない。例え誰かに見られても火の玉を何処からともなく出現させ、それを投げ付けて殺しました、なんて警察に言ったところで、頭の可哀想な人と思われてお終いだろうし、例え信じてもらっても凶器などの物的証拠も残らない。結果事件は迷宮入りに……。

……俺はなんて恐ろしい所に来てしまったんだ！　くそ、一体俺を拉致した奴は何が目的で俺をこんな所に――――

「ぐはっ！？」

そんな事を考えていると不意に吹き飛ばされた。いきなり動きだしたあの銅像に殴り飛ばされたのだ。

な、何すんだこいつ……何で俺を殴る？　ってかやっぱり動くのかよ、そうかとは思っていたけど。一体どういうからくりで操ってるんだろう。ってか、お腹痛い、吐きそうなんですけど。

そんな事を思っている間にも銅像は素早い動きで俺に殴りかかってくる。喧嘩の心得なんて無い俺はそれを避ける素振りすら見せれぬうちに殴り飛ばされていく。

一体俺が何したって言うんだよ、クソ野郎。つーか周りの奴も止めろっての、これただの虐めじゃん。

「ぐっ！」

クソが……後で覚えてろよナルシスト。ぜってーボコしてやるか――――

「ぐはっ！」

――――ク、ソ……意識がと、んで――――

もうかれこれ十数発殴られた俺は既にグロッキー、意識は朦朧として立っているのか座っているのかも分からない状態だった。

――俺、死ぬのかな？

そんな思考が頭の中を駆け巡り始めた時ルイズの声が聞こえた。

意識が覚醒していゆく――

焦点が合っていなかった視界が徐々に確かな形を映し出す。そして、完全に意識が回復するとそこに見えたのはルイズの真っ赤な顔だった。

「！？」

驚いた。なぜならルイズが俺にキスしていたからだ。しかもその上、契約の時のような軽くじゃない、下唇を俺の口内に突っ込んでくるディープキスもどきと来た。

美少女が真っ赤な顔しながら自分にディープっぽいキスをしてくる……そんな事されて興奮しない青少年なんているんだろうか……いや、いない！

勿論俺も興奮した。アドレナリンが大量放出しているのか、今まで痛いと感じていた体中の痛みが感じられない。

「これでいいわよね」

暫くしてルイズがキスを止めると、真っ赤な顔を俺から離しながら、ぶっきらぼうにそう言った。

……お前は、なんて――

――なんて可愛いいんだぁ！　何この反則級の可愛さ！　これがツンの後に来るデレの威力なのか！　恐るべし、ツンデレ！

心の中でつい叫んでしまった。

そして次の瞬間にはルイズを守りたい、この子の為に戦いたいという感情が心のそこから湧き上がって来た。今なら素手であの銅像を破壊できそうだ。

まぁ、それは気のせいだろうが、何かしら武器を持っていれば倒せるような気がするのは嘘ではない。

何か武器を探そう、そう思って周りを見渡そうとしたらルイズがこんなことを言った。

「さ、その剣でギーシュなんかやっつけちゃいなさい！」

その剣？　ってどの剣？

と一瞬思った俺だが、ルイズの視線が俺の腰に向けられていることに気づくと、これがあったかと今更気づいた。

でも、こんな劇用の張りぼて剣が役に立つのだろうか？　そう疑問に思ったが、他に武器らしい武器も無い。しょうがない、これを使うしかないか……。そう諦めて剣を引き抜いて驚いた。

――これは……なんだ？

剣の使い方が頭に流れ込んできたのだ。どうやったら上手く相手を切り裂けるか、どのタイミングで切りつけたら反撃が来ないか、この剣で最もダメージを与えられる部位はどこか、そんな情報が伝わってくる。そして、それはただの知識ではなく、体にそのまま反映される経験としてだ。しかもその上、何故か体が自分のものとは思えないほど軽い。

今の状態なら１００メートルを五秒で走り抜けられるかもしれない。そんな風に思うほど、それほど体が軽かった。

それにしても驚いたことがある。この得体の知れない情報から分かったのだが、この剣の名前は『約束された勝利の剣』及び『風王結界』という『本物』の剣と鞘だそうだ。少し期待していたのだが、『エクスカリバー』じゃ無かったっぽい。まぁ、あの剣は想像上の物だし、あるはずないけどさ。

それにしても『本物』の剣を劇に使うなんて何考えてるんだあの腐女子は、普通劇で刃引きされてない剣を使うか？　銃刀法はどうした！

色々文句はあるが、まぁ、でも今回に限っては感謝しておこう。これであいつを倒せるんだから。今の俺はターミネーターにも負けない自信がある。

今まで無様にやられててやったんだ、今度は俺が格好良く決める番だぜナルシスト……。よし、さっさとあいつを半殺しにしよう。

でもその前に一応ルイズに聞いておかなくちゃな。あの女たらしの事だ、もしかしたらルイズもギーシュの事が好きってこともありえる。ギーシュをボコボコにして後で愛想つかされたら、俺はこの

異国の地に一人で放り出されちまう。そしたら結末は餓死しかない。

「マスター……」

「な、なによ」

「別に……（半分ぐらいなら）殺してしまっても構わないのでしょう？」

俺がそう言ってみると、凄く驚いた表情をされた。ああ――――やっぱりあのナルシストの毒牙に引っかかっていたようだ。

「ちょ、あんた何を――――」

俺を止めようと必死なのがいい証拠だろう。予想がついていたとはいえ……ショックだ。そんな俺の暗い気持ちを知ってか知らずかギーシュが俺に向かって怒りだした。

「いい加減にしたまえよ？　僕を馬鹿にしているのかい？　さっさとやられたまえよ、平民」

そしてそう言うと一体の銅像をこっちにけしかけた。だが、今の俺にそんなものは効かん！　いつの間にか無色透明になってる俺の偽エクスカリバーで銅像に攻撃する。

「な、何！？」

――――ス、スゲー、強そうな名前だなと思っていたけど、まるで豆腐を斬ったかのように切り裂くなんて！

俺が内心で驚いていると（勿論、表情は格好付けて無表情）ギーシュの奴も驚いていた。すぐに何体も銅像を出してくるギーシュだが、全ての銅像はこの剣に一撃で機能停止させられていた。

「ふ、ふんいくら君でも7対同時には戦えまい！」

どうやら俺は調子に乗りすぎたらしい。ギーシュが本気を出したようだ。今までは一体ずつだった銅像を七体同時に出しやがった。

それは、反則だろ……。

俺が唖然としていると銅像が走ってこっちに殴りかかってきた。

――――ヤバッ！

やられる、そう思ったときだった。頭に言葉が流れ込む。それは声に出すのが畏れ多いと体が直感的に感じてしまうほどの力ある言葉だった。

そんな威圧感に一瞬言おうか言わないか迷った俺だったが、もう、どうにでもなれという気持ちで言ってみることにした。

「風よ――――」

――――ただ、その言葉に従うだけ、簡単だ。怖がるな、俺。

風が逆巻く剣を下段に構える。そして、どんどん巨大になってゆく力の奔流を

ためて、

ためて、

そして……

解き放った――――

「――――吼え上がれ！」

凄まじい風と体にかかる反動に前身がきしむのが分かった。

――――クッ、剣先が定まらない！

ルイズが何か言っているようだがそんな事気にしている場合ではない。あまりの反動の強さに剣先がナルシストから外れてしまった。クソ惜しいな。後ちょっとだったのに。

まぁ、しょうがない後は格好つけて終わりにしよう。あの竜巻と一緒にごっそりと体力をもってかれてしまった。気絶しそうに疲れてる。さっさと寝床に戻って昼寝でもしよう。

「侮ったな。私の二つ名はブリテンの赤き竜。魔力の封印のせいで普段は貴様に劣るが、魔力さえ満ちているのなら貴様如きに劣る事はない」

「ま、まいった……」

俺がそう言うとギーシュはがっくりと肩を落としながらそう言った。ふん、ざまーみろ。

「運が良かったですね、貴族の少年。だが、次は無いという事を確と胸に刻みつけておきなさい」

そう言って八つ当たりしないように釘を刺すことも忘れない。俺の言葉にうんうん頷いてるギーシュに内心でキモッ！　と、思いながら格好よく颯爽とルイズの部屋に帰ることにした。ふふっ完ッ壁だ。

心の中で俺は自分に喝采を贈っていると、あることに気づいた。

――――ここ、何処だろう？

～召喚前～

一人の青年が紳士服に装甲を無理矢理付けたような服を身につけ佇んでいた。

手には台本が乗っており、その中にあるであろう台詞を血走った目で凝視していた。周りも彼と同じような人が何人かおり、彼らは近寄りがたい何ともいえないオーラを醸し出していた。

しかしそんな雰囲気をものともせず、青年に近づく影があった。黒髪のロングヘアーを靡かせたその和風美人は、赤い布に包まれた細長い何かを、非常に丁寧に両手で持ち、顔に柔らかな笑みを貼り付けながら青年に話し掛けた。

「どう？　台本覚えた？」

「……」

普通の男ならどんな状況でも答えてしまうであろう彼女の問い掛けを、青年は軽く無視する。

「ちょっと、こっち向いてよ」

そのことに不満なのか、彼女は眉間に皺を寄せると青年にデコピンをした。

「いてーな、何か用か？　自称凄腕魔法腐女子さん」

「君はいちいち人の心を逆なでする言い方するわよね。それと、一応言っとくけど、『自称』ではないわよ、自他共に認めてるもの」

「俺は認めてないぞ。魔法なんて有るはず無いじゃん」

「あんた『は』でしょ？　他の人は認めてるのよ」

「相変わらず電波だな、お前は」

やっと顔を上げた青年は哀れんだような表情で彼女を見てそういった。

「で、何の用だよ」

しかしすぐに興味なしといった顔で、台本に目を落とすと彼女が

来た理由を尋ねた。その言葉に彼女は、待ってました！　と言いながら手の中の細長い何かを赤い布から丁寧に、それこそ丁寧すぎるほどに静かに取り出すと、自慢したように彼に見せ付けた。

「これはね、聖ガルガノ修道院から、色々なコネを使って借り受けた『本物』のエクスカリバーを魔術的観点から最高の状態に復元し、尚且つＦａｔｅの中のエクスカリバーの概念を、私の作った大規模な儀式魔法陣を使って魔術師二十人がかりで付加させた、正真正銘『アルトリア・ペンドラゴンのエクスカリバー』なのよ！　ま、正確にはほぼ同じ、なんだけど。それでもすごいことなのよ。あ、でも、惜しくも鞘はただの魔力を抑えるだけの偽物なんだけどね」

「ふーん」

「ちょっと、ちゃんと聞いてんの！？」

驚くだろうと思って自信満々に言っただけに、青年の興味のなさそうな言い草は、彼女に恥をかかせるのに十分だったようだ。顔を真っ赤にして彼に詰め寄る。しかし、彼はそれに適当に相槌をうつだけで興味を見せない。彼女の言うことを全く信用していないようだ。

「はいはい、聞いてますよっと」

「あんたは……分かってない！　全然、分かってない！　あんたこれがどんだけ魔術的価値があると———」

「先〜輩！　ちょっとこっちに来てください、手が足りないんですよ〜！」

生返事を返す青年に食って掛かった彼女だったが、後輩の声によって遮られてしまった。そのことに苛々してるのか、むー！　っと叫ぶと後輩の方に向かってゆく。やっとうるさいのがいなくなったかと青年が溜息をしようとした時、彼女が早歩きで戻ってきた。

「どうした？　今度は『本物』の火星人でも手に入れたか？」

青年は馬鹿にしたようにそう言う。その言葉に、いちいちムカつくわね……と、彼女は呟くと彼にこう言った。

「ちょっと今、忙しいことになっちゃってるから少しの間この剣持っててくれない？」

「俺、もう本番始まるんだけど」

「ほんとに少しでいいから！　お願い、これを傷つけるわけには行かないのよ」

「……」

「お願い……」

「……分かったよ、さっさと用事終わらせて来い」

「ありがとう！　すぐ戻る」

彼女はそう言うと、走ってその場を立ち去っていった。

ふさふさ靡く彼女の黒髪から、剣に目線を移すと、青年はこの剣をどうしようかと唸りを上げた。

――――うーむ、これ持ったまんまじゃ台本読めないし、どうしようか。

床に置こうとも思ったのだが、張りぼてでも彼女の大切なものらしいし無下に扱うのは気が引けた。悩んだ挙句たどり着いた答えは――――

「腰に付けとくか」

彼は腰に今まで付けていた剣を鞘ごと抜いて地面に置くと、代わりに彼女から渡された剣を差し込んだ。と、そこで本番の呼び出しがかかった。剣をどうしようかと一瞬悩んだ彼だったが、ま、いっかと呟くとスタンバイポジション、ステージの真下のリフトの上にスタンバイした。

天井には銀色に輝く鏡が薄暗いその場所で鈍く光を放っていた――

第四話『変態ナルシストに絡まれたようです』（後編）（後書き）

今回はどうだったでしょうか。ちょっと後付けっぽい設定が結構ありますが、ちゃんと最初からそういう設定でしたので、後付けじゃん！　は勘弁してください。　正直言い訳ッぽいですが。　さて、例の聖剣についてですが、イタリアはトスカーナ州のシエーナにある、聖ガルガノ修道院。そこにあるエクスカリバーのモチーフとなったとされる剣を本作では本物と扱うことにしました。それをどうにかして借りて（ありえないですが）それを魔術で復元してどうのこうのというものです。　ちなみに、アルトのいた現代ではＦａｔｅの世界のような感じで魔術があったりします。設定では、アルトの世界の魔術師が書いた物語がＦａｔｅと言うことになっています。

と、まぁ、設定のお話は終わりにして、今回の話、、ルーンが教える『本物』のエクスカリバーと言う情報を『本物』の普通の剣と勘違いしていたことに気づかれたでしょうか？　分かりにくかったらすみません。　ちなみに、アルトは未だに『名前の格好良いちょっと切れ味のいい剣』程度にしか思っていません（笑　さて、次はフーケ編がきますね。多分１～２話後にフーケ編に突入すると思います。だんだん、書き方が雑になってきている気がするのでフーケ編は丁寧に書こうと思います。あ、それと明日から一週間ほど高校生活最後の期末試験に入りますので、更新速度が遅くなるか、もしくは今週末まで止まるかもしれませんがご了承ください。では、また合いましょう！

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（前編）（前書き）

切がいいので、また前後半に分けました。

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（前編）

嘘は泥棒の始まりって言うけど、その言葉自体が嘘だって事に気づいてない大人は皆馬鹿だと思う今日この頃。

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（前編）

あの一方的虐めを受けた次の日の朝、俺は痛む体に顔をしかめながら食堂の裏の使用人室的な所でシチューを食っていた。はっきり言って美味過ぎる。食い始めて思い出したが、この国に拉致されてから何も食っていなかった。

昨日の夜ルイズが断る俺を無視して指から滴り落ちる血を無理矢理飲まさせられはしたけど……こんなの腹の足しにはならないし正直言って不味い。吸血鬼でもないんだから上手いと感じるはずが無いんだけどな。

そんな目に遭うのも自業自得だからしょうがないんだが、すきっ腹に血はきつい。スゲーいっぱい鼻血が出たことがある人は分かるかもしれないが、超胃が気持ち悪かった。

話がそれたようだな。まぁ、そんなこんなで今まで倒れなかったことに驚きだが、今日とうとう倒れたらしい。

あの、青髪のランサーっぽい子――――タバサと言うらしいんだけ

ど、ルイズから、あの危険極まりない女の子がなにやら俺を探していると聞いた俺はまた氷柱で攻撃されるのではないかと身の危険を感じ、朝早くに洗濯物を持って外にでた。が、結局また道に迷い、昨日の疲労と体の怪我（一応ルイズが手当てしてくれた）、そして空腹により気絶してしまったのという訳だ。

そんな超無様な俺をあの心優しきシエスタちゃんは助けてくれた上に、俺の持っていた洗濯物も洗ってくれ、さらにこんなおいしいご飯まで貰った。

感謝しても仕切れないと思った俺は、なにかして欲しいことは無いかと聞いたのだが、シエスタちゃんは昨日のことだけで十分です、と良く分からない事を言って断った。

ホントに謙虚で良い子だなぁ……と思いながらシエスタちゃんの顔を見て癒されていると、俺の視線が嫌だったのだろうか部屋を飛び出て行ってしまった。

「彼女、どうしたんでしょうか？　私（の視線）が嫌だったのでしょうか？」

と呟いたら近くにいた名も無きメイドさんがシエスタ可哀想に……と哀れそうな表情で言っていたので、俺の思考は間違っていないはずだ。ルイズにはギーシュがいるし、シエスタちゃんには嫌われた。……俺は何を希望に生きればよいのでしょうか……。

と、軽く鬱に入っているうちにシチューも食い終わってしまった。洗濯はシエスタちゃんがやってくれたし、正直することが無い。何すっかなーと考えていた俺は取り合えずまた学校探検にでも行くか、という考えに至り、料理を作ってくれたマルトーさんにお礼を言っ

て外にでた。

と、ここでなにやら俺を呼ぶ声が聞こえた。まさかロリ少女タバサか！？　と思いビクッとしながらゆっくりと振り返るとそこには蒼とは対照的なピンクの髪の少女が立っていた。

「ルイズでしたか。そんなに慌てて、どうしたのですか？」

ルイズに俺はそう尋ねた。するとルイズは溜息をつきながら俺に、こんなことを告げた。

「アルトが昨日のギーシュ戦で壊した壁、宝物庫だったらしくて……泥棒に入られたそうよ」

……俺って、不幸だ。

［Ｓｉｄｅ：オスマン］

彼のことを聞いたのは昨日の事だ。

ミス・ロングビルと談笑いたらノックもなしにコルベール君が入ってきた。せっかくの楽しい一時を邪魔されたワシは少し意地悪して名前を忘れた振りなんかをしていたが、彼のあまりにも真剣な表情に、しょうがないと、ミス・ロングビルに一回退室してもらって話を聞くことにした。また、なにやら変な実験でも成功させたのかと思っていると。彼の口から出た言葉は信じられないものだった。

曰く、伝説の使い魔、ガンダールヴが召喚された。曰く、召喚した者は全く魔法が使えないヴァリエール家の三女。曰く、彼は武器がなくても平和慣れしたスクエアメイジごときでは相手にもならない程の強さ。

そんな事を言い放った。

コルベール君は王室に報告しようと言ってきたがそれは駄目だと言って止めさせた。あんな伝説を王室に与えたら嬉々として戦争を始めるからだ。そんな事彼の為にも、その主の為にもしてはいけない。

だから、このことはワシだけが知っていればいい。

そう思っていた時だった。

グラモン家の四男と件の使い魔が決闘すると言うではないか。これは絶好の機会だ。彼が本当にガンダールヴなのか、それを確かめる為に丁度いい。

ワシはそう思い、眠りの鐘を使いたいと言う教師達を部屋から追い出し、決闘を見守ることにした。

しかし、決闘は以外にもグラモン家の倅の一方的な蹂躙だった。使い魔君は避けることも出来ずただ殴られ続けていたのだ。

「こ、これは一体……」

コルベール君がそんな事を呟く。そんな事を言われてもこっちが

聞きたいぐらいだ。自分でもどういうことなのか分からないまま決闘が続いていく。

やがて、使い魔君がグラモン家の倅のゴーレムに殴り飛ばされて動かなくなった。

――――終わりじゃな……

そう思って遠見の鏡から目をそむけようとするとコルベール君が止める。

「何じゃね？　見ての通り決闘は彼の惨敗、彼がガンダールヴというのは何かの間違いじゃろ」

しかし、コルベール君がしつこく行ってくるので、もう一回鏡を覗くとあの使い魔君は主人のミス・ヴァリエールとキスをしていた。

何をしているのか疑問に思っていたが、その後の彼のいきなりの豹変振りに何か理由があったのだろうと推測した。結果だけいえば使い魔君の逆転勝ち。

しかしその勝ち方は信じられないものだった。すさまじい威力の風を剣に溜まらせ、そして一気にその力を解き放つという荒業。

威力は凄まじく、最低でもスクエア、いやペンタゴンクラスの威力だ。あんな威力の魔法を使える平民など居るはずが無い。

――――あれはまさしくガンダールヴに違いない。

そう確信したワシはコルベール君にきつい口止めをし、下がらせ

た。

「神の左手・ガンダールヴ……か。一体彼は何の為に召喚されたのかのう」

彼はこの世に平和をもたらすのか、それとも……

今は、見守るとしよう。彼が何者で、何故此処に召喚されたのか。それは近いうちに分かる。そんな気がするのだ……。

［Ｓｉｄｅ：ルイズ］

私、キュルケ、タバサはミス・ロングビルの案内で近くの森に来ていた。

と、いうのも、宝物庫に入った泥棒の居場所が分かったので捕まえに来ているのだ。泥棒の名は『土くれのフーケ』。錬金の魔法を使って宝物庫の壁や金庫を『土くれ』に変えて穴を開け盗み出す盗み方からそんな名前がついたらしい。

何で、私たち生徒が捕まえに来ているのか。

それは簡単なことだ、宝物庫が壊れたのはアルトのせい、つまりは主人である私のせいだ。だから責任を取って私が捕まえに来たのだ。まぁ、教師達が怖気づいて捕まえに行こうとしなかったことも大きな理由を占めているが。

本当はギーシュも責任を取るべきだが、昨日の決闘がよっぽどこたえたのか、部屋で寝込んでしまっていた。だから私一人で行こうとした。そしたら何故か参加すると言い出したタバサとそれについてきたキュルケも一緒に行くことになり今、三人で馬車に乗って、ミス・ロングビルが近隣の農民に聞きだした、フーケの居る隠れ家に向かっている。

「ねぇ、ルイズ。貴方の使い魔、本当に連れてこなくて良かったの？」

不意にキュルケがそんなことを聞いてきた。

そう、私は今回彼を置いてきた。

何であの優秀なアルトを置いてきたのか、それは彼のことが心配だったと言うことが第一の理由に挙げられるだろう。

「アルトは本当なら全治一週間の怪我なの。実際昨日は死にかけてたのよ？　連れて行けるはず無いじゃない」

「でも相手は戦いなれた土のトライアングルメイジよ？　私やタバサはいいとして……ルイズ、あなたはどうするのよ？　正直足手まといにしかならないわよ」

しかし、その理由は表面上の理由だ。本当は彼に劣等感と不安感を抱いてしまったのだ。使い魔はメイジの能力の高さの証明だ。始めは凄い使い魔だということで、やっと馬鹿にされなくなると思った。

でも、冷静になって考えてみる。

――――あんなに凄い使い魔、なのに私は……

私の使い魔は凄い。火のトライアングルのコルベール先生を一瞬で取り押さえる体術、ギーシュのワルキューレを一撃で切り裂く剣技、スクエアクラスの固定化をものともしない風の魔法。

どれをとっても自分では彼の足元にも及ばない。私は契約によって彼と主従の関係を結んでいるが、こんな私では、アルトはいつか自分に愛想をつかして去っていってしまうのではないか？　そんなことはないと分かっているのにそう思ってしまう。

彼に釣り合っていないと言う劣等感と、いつか自分の元から居なくなるのではないかと言う不安感。それを拭う為、私はあえて彼を学院に置いてきたのだ。

勿論、彼を労わる気持ちも本当だ。アルトも、私のそんな気持ちを察したのか最初は行くと聞かなかったのに、途中から静かになり、本当は分かっているだろうに眠りの秘薬を混ぜたワインを何も言わずに飲んでくれた。

そんな彼の優しい気持ちが私に注がれれば注がれるほど罪悪感で胸はいっぱいになった。彼は私を信用してくれているのに私は彼を信用するどころか、嫉ましく思っている。

そんな自分が――――無償に嫌になった。

「ちょっと！　聞いてるのルイズ！？」

「は？　え？」

「え？　じゃないわよ！　もうついてるんだけど」

どうやら考え込みすぎて時間を忘れていたようだ。いつの間にか馬車は止まっておりキュルケたちは前方に建っている小屋に向かって歩いていた。私は慌てて馬車から降りるとキュルケの横に走っていった。

「魔法も『ゼロ』緊張感も『ゼロ』なのね」

「……」

いつもなら食って掛かるところだが、今は何故か反論が出来ない。実際そうなのだからしょうがないと思ってしまうのだ。キュルケもそんな私をおかしいと思ったのか気味悪げな顔をしている。

場に嫌な沈黙が流れた。

「さて二人とも、これよりフーケを捕まえる作戦をタバサさんが教えますので聞いてください」

ミス・ロングビルが雰囲気を変えるように明るい声でそう言うと、私とキュルケは気を取り直してタバサに向き直った。

タバサから告げられた作戦はシンプルなものだった。

一人が囮で小屋に近づき中を確認して、居たら挑発して外におびき出す。そしてでてきたところを魔法の集中砲火で攻撃し、倒すと言う作戦だった。

役割分担は魔法が使えないと言う理由から私が囮、そしてキュルケとタバサが集中砲火という分担になった。ちなみにミス・ロングビルは周りに仲間が居たりしないか偵察してくる、と森に行ってしまった。

私たちはお互いに目を合わせると無言で頷きあった。作戦開始の合図である。

私は気づかれないように窓などから見えるところを避け、素早く入り口にたどり着いた。そして、一回深呼吸をして気合を入れてから静かにドアを開ける。

「居ない……」

しかし、中には誰も居なかった。合図を出して残りの二人を呼ぶと三人で小屋の中を捜索した。

「破壊の杖」

破壊の杖はあっさり過ぎるほど簡単に見つかった。タバサが指を指した先には細長い箱に入った破壊の杖が棚の上に無造作においてあったのだ。

若干拍子抜けしてしまった私たちだったが、気を取り直していこう、何処にフーケが潜んでいるか分からないのだから。

そう思って気合を入れなおしながら小屋を出た私たちはあまりのことに驚愕した。目の前に巨大なゴーレムが拳を振り上げていたからだ。ゴーレムの後ろにはフードを被った人……フーケらしき奴も

居る。

――――フーケのゴーレム！？　なんて大きさなの……

一瞬呆然としてしまった私だったが、何とか気を取り直してゴーレムに杖を向けた。

「ファイヤーボール！」

私は呪文を唱えて攻撃する。キュルケやタバサも応戦しているようだが相手の回復速度が速すぎる。削っても削っても修復されるので切が無い。どうしようかと思っているとタバサが撤退を進言した。

キュルケとタバサが逃げ出す。私も最後に『ファイヤーボール』を放つとゴーレムに背を向けた。

――――本当にそれでいいの？

しかし、私の足は動かなかった。脳は逃げろといっているのに何故か体が金縛りにでも遭ったかのように動かないのだ。

此処で敵に背を見せることが私の、存在意義を示すことなのか。此処で逃げたら私は一生このまま『ゼロ』のルイズのままな気がする。そんなの嫌だ。

「ちょっと、ルイズ！　あんた何やってるのよ！　さっさとこっちに来なさい！」

前方では心配そうなキュルケがこちらに向かって怒鳴っていた。普段あんなに嫌味を行ってくるのに今は自分を心配している。何と

も滑稽だと思った。

「私は逃げない！　あいつを捕まえれば誰も私を『ゼロ』なんて言わない！アルトにも釣り合える！　私はあいつを絶対に倒さなくちゃいけないのよ！」

そう言いながら私は魔法を唱えて相手に打ち出す。どれも失敗した爆発。全くといっていいほどダメージは与えられていないでも――私は！

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょうが！　魔法の使えないあなたじゃ殺されちゃうわよ！？」

「魔法の使えるものを貴族と言うんじゃない」

もう一度魔法を放つ。それと同時にゴーレムの腕が空高く振り上げられた。

「敵に背を向けないものを貴族というのよ！」

もう一度魔法を唱えようとして気づく。もう拳は振り下ろされていた――――

「ルイズ！！」

――――私は……ただ、認められたくて。ただそれだけだったのに。

ゴーレムの拳が凄く遅い動きで私に迫ってくる。

――――ああ、私は死ぬんだ。

最後だって言うのに思ったことはそんな言葉。死ぬのは怖くなかった。どうせ、私一人居なくなったところで世界は何も変わらない。ルイズ・フランソワーズという個が消える。唯それだけのことなのだ。

ただ、心残りなのはアルトのことだ、私が死んだら彼はどうなるのだろうか？　暮らしていけるのだろうか？

そして彼は――――アルトは悲しんでくれるだろうか？

「アルト……」

最後にお礼を言いたかっ――――

［Ｓｉｄｅ：キュルケ］

凄まじい轟音と共にルイズはゴーレムに殴り潰された。

「なんてこと……」

大量の砂煙の中、私はその場にへたり込んでしまった。

――――ルイズが死んだ。

それを認識して体の中から何かが溢れてくる。ルイズは友達だった。彼女はなんて思っていたか分からないが少なくとも私はそう思

っていた。魔法は駄目だけど、座学は優秀なルイズ。普段はトゲトゲしてるけど実は唯の照れ隠しで、本当はとても優しい少女。誰よりも才能が無いのに誰よりも努力していたルイズ。

何故彼女が、何であの子が死ななければならいのか。

———何で……

「何でこんなことするのよぉ！」

涙が止まらない。視界がぼやけて前が上手く見えない。

悲しくて、悲しくて

そして次に表れた感情は憎しみだった。

「殺してやる……出てきなさいフーケ！　貴方は私が許さない！」

未だ晴れない煙の向こうに居るであろうフーケに向かって叫ぶ！そして立ち上がると杖を構えて前に走っていく。

「！？　何するのタバサ！　離して！　私はルイズの仇をとるのよ！」

しかし、その行動はタバサによって抑えられていた。タバサは首をフルフルと振って私を見つめる。

———なんでこの子はこんなに冷静なの！？

タバサは何も悪くない。それは分かっていいるが、こんな時でも

感情を見せない彼女に怒りが巻き起こって来る。

「じゃあ、このまま見逃せって言うの！？　目の前でルイズを殺されたのよ！？」

私の怒鳴り声にも全く表情を変えずタバサは首を振る。

「じゃあ、どうしろって――――」

「――――ない」

なんだ？　今なんていった？　なんてタバサは言って――――

「ルイズは死んでない」

「え？」

その時凄まじい風と共に煙が晴れた。そこには――――

「サーヴァント・セイバー、只今参上した」

――――純白の騎士がいた――――

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（前編）（後書き）

こんばんわ、もしくは、こんにちわ！　第五話を投稿させていただきます。最近どんどん作者の暴走が激しくなってきてるような気がします。

ですが、そこは生暖かい目で見守ってください（笑

次は前回のギーシュ編同様アルト視点になると思いますので、楽しみ（だとありがたい）に待っててください。　　では、また会いましょうｂ

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（中編）（前書き）

すみません。中編が入ってしまいました。
あと、あまり出来がよろしくないので、今回はあまり期待しないでください。いつも期待していてくださった場合ですが……（汗

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（中編）

今日始めてお酒を飲みました。ワインでした。不味かったです。しかもスゲー眠くなりました。もう二度と飲みません。

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（中編）

［Ｓｉｄｅ：シエスタ］

私は今日もいつものようにメイドの仕事をしていた。貴族様に料理をお運びしたり、洗濯物をしたり。

でも、心の中はいつもと違った。私は一人の青年に恋をしている。その相手の名前はアルトという。ミス・ヴァリエールの使い魔で平民の青年だ。

彼は私を助けてくれた。些細な約束を守って、私を庇ってくれたのだ。

敵う筈がないと思った。だって彼は平民。いくら立ち振る舞いや雰囲気が平民らしくなくても平民であることには違いないのだから。でも、結果は違った。

何度も相手の貴族の出したゴーレムに殴れながらも勇敢に立ち向かい、そして――――彼は勝利した。

憧れた。強烈に憧れたのだ。

それからは彼の事を目で追うようになっていた。そして彼と会話するうちに、憧れはすぐに恋に変わった。

こんなに人を好きになったのは生まれて初めてだった。

私は彼と話したくてご飯に誘ってみた。彼はおいしいといってくれた。心が暖かくなるのが分かった。幸せだった。

そんな時、彼が私を見つめていることに気づいた。そこで分かってしまった。

――――彼は私のことなんて見てない……。

彼の懐かしむような優しげな瞳、あの目はきっと私ではなく私に重ねて誰かを思い出しているんだと分かった。だって、私と目が合っているのにその目は遠くを見ていたから。

胸が締め付けられるように痛くなる。

私は思わずその場を飛び出してしまった。何故か無性に悲しくなったのだ。

部屋に戻った私は、暫くの間考えこんだ。彼が好きなのは誰だろうかと。

結局分かったことは彼がミス・ヴァリエールを大切に思っているということだけ。でも、彼が好きなのは彼女じゃないということは分かる。きっと召喚される前に恋人がいたのだろう。

そこで私は気づく。これはチャンスなのではないかと。彼からチラッと聞いた話では東方のニホンという国から来たらしい。東方に行くにはエルフが居るサハラを越えなくてはならない、そう易々と行ける所じゃないのだ。当然、恋人と会うことも滅多に、もしくは一生無いかもしれない。

なら、彼の思いを私に向ければいいんじゃないか。今彼に一番近しいのはミス・ヴァリエールだろう。でも、私だって努力すれば彼ともっと親しくなれるはずだ。恋敵が貴族だろうと関係ない。だって、貴族だからといって諦めては駄目なのだと彼に気づかされたのだから。

そうと決まったら私は彼に謝りに行く為に部屋を出た。彼が何処にいるかなんて分からないはずなのに私の足は自然と『あの』場所、彼に救われた場所に来ていた。なんとなくそこに行けば会えるような気がしたのだ。

「アルトさん……！」

私の勘は当たったようで、少し大きめな木の下で、ミス・タバサの使い魔と一緒に立っていた。私は胸が一気に温かくなるのを感じた。

———ああ、彼と一緒にいるだけで私はこんなにも幸せになれるんだ。

私は彼に話しかけるために小走りで近寄っていった。しかし彼に近づいて分かった。彼は今私にかまっていられるような状態でないことに。

普段あんなに冷静な彼が、そわそわしているのだ。顔には焦りが浮かび冷や汗らしきものの見えた。

そこで思い出す言葉。

『昨日フーケが学院に忍び込んだんだってさー』

『フーン、でどうなったの？　誰か先生方が捕まえにいったんでしょ？』

『それがね！　何と捕まえにいったのがあのゼロのルイズらしいのよ！　しかもあの使い魔は置いて行ったんだって』

『うそ！？　馬鹿じゃないの！？』

先ほど、廊下で話していた女生徒達の会話だ。私は最初唯の噂話だと思っていた。だって、まさか生徒に責任を丸投げするはずがないと思っていたし、何よりアルトさんを置いて行く筈が無いと思っていたからだ。なんだかんだあの二人は仲が良いし、唯の作り話だと思っていたのだ。

でも今の彼を見て確信した。あの生徒達が言っていたことは本当だったのだ。きっと彼は何も知らないうちにミス・ヴァリエールに置いて行かれ、それに気づいて焦っているのだろう。きっと彼は彼女を助けに行く気なのだ。

「シエス……タ？」

彼はどうせ気づいていたくせに一瞬驚いた表情をすると、ぼつの悪そうな顔をして私の名前を呟いた。私も釣られて彼の名前を呼ぶ。

「アルト……さん」

きっと彼は自分の主のところに行く気だろう。でも、彼の焦りの混じった顔を見ると彼が二度と帰ってこないような気がして、私はわざわざ彼に確認を取った。嘘であって欲しい。彼が今から命がけの戦いに行くなど、間違いであって欲しいという希望を込めて。

「何でミス・タバサの使い魔さんが此処にいるんですか？」

彼は、これを見てわからないのか？　といったように後ろの風竜を一瞥した。

つまり、彼はこの風竜に乗ってミス・ヴァリエールを追いかけるつもりなのだろう。ミスヴァリエール達はきっと馬車で行ったはずだ。風竜なら追いつけるだろう。

「すみませんシエスタ。事情は話せませんが、私には行かなくてはいけない所があるのです」

「……やはり、行くのですか……だからミス・タバサの使い魔さんなのですね」

彼から帰ってきた言葉は私の思った通りの言葉だった。

暫くの静寂。

そして次に、悲痛な顔で彼から帰ってきた言葉は、私の希望を簡単に打ち砕き、そして絶望に落とし込めた。

「さようならシエスタ、もう貴方と会うことは出来ないと思います。だから……どうか忘れてください」

「え……？　そ、そんな……何でそんな事を言うんですか！？」

あまりの事に、頭がついていかない。

もう会えない？　忘れて欲しい？　何故？　どうして？　そう思ったら自然とそんな事を口走っていた。私は力が足から抜けてその場にへたり込んでしまう。

彼はそんなに私にすまなそうな顔を一瞬すると、私に背を向けた。

そして一言。

「さようなら……」

そう言うと、私の言葉を待たずにミス・タバサの風竜に乗り飛び去っていってしまった。

「そんな……アルトさん」

そう呟いて自分が泣いていることに始めて気づいた。彼はもう会えない……つまり死を覚悟しているということだ。

忘れて欲しいという言葉は、不器用ながら彼なりの優しさなのだ

ろう。でも、その優しさは余計私を悲しくさせたのだ。

しかし、私は自分に叱咤を入れ考え直す。

――何を悲観的になっているのよ私。

そう、私が彼を信じないでどうするのだ。彼はあの時貴族を倒して見せたじゃないか。今回もきっと無事に敵を捕まえて帰ってくるに違いないんだから、泣いてどうする。彼は死なない、きっと帰ってくる。

待っていよう彼のことを。

私の最愛の人を。

「アルトさん、私は待ってます」

私の言葉は春の風にかき消されて儚く消えた――――――

［Ｓｉｄｅ：アルト］

「……」

目が覚めた。

学院長室から帰ってきた後、ルイズにいきなり一緒にワインでも

飲まないかと誘われた俺は、最初は断ってみたんだが結局言いくるめられて飲むことに。

結果から言うと俺は超酒に弱かったらしい。一口飲んで、もうその後から記憶が無い。どうやら眠ってしまったのだろう。

そういえばルイズ何処いったんだ？　ああそうだった、土倉（つちくら）のフー子とかいうコソ泥を捕まえに言ってんだっけ？　それよりネーミングしたの誰だよ、センス無さすぎだろ！

と、ダサい名前のことは置いといて、ルイズなら大丈夫だろう。なんたって爆殺ののエキスパートだ、捕まえ損ねたとしても爆発でちょちょいのちょいだろうからな。

今日は快晴、何しようかな。

……あ、そうだ、シエスタちゃんのところにでも行って癒されに……嫌われたばかりじゃないか。……ホント、何しようかな。取り合えず外にでるか。

本当に何もすることが無い俺はまた迷うくせに部屋の外に出てみることにした。

暫く歩いていると、偶然にもあの広場に出た、ギーシュにボコされたところだ。それを見たら思い出したように体が痛くなってきた。あー痛い、ちょっくら休憩でもするか。

俺はよさげな木下に寝そべると、木漏れ日を見て綺麗だなーと思いながら目を瞑った。寝ようと思ったのだが、さっきまで寝ていたのだ眠れるはずも無く、仕方なく何か考え事をすることにした。

まずはこれからどうするのかと言うこと。日本には勿論帰りたいが、身分証明書もパスポートも無い国籍不明の俺が帰れるとは思わない。例え出来そうな状況になったとしても、此処は国立の暗殺者養成学校だ、機密を知っている俺を簡単に日本に帰らせてくれる筈が無い。

何とか警察などに見つからないように大使館に亡命することが一応の目標。俺の顔立ちは根っからの日本人、大使も分かってくれるだろう。……多分。

次に……

ってもうネタ切れじゃん、うわ、俺ってつまらない男。

「こんなところで何してるのね」

そんな自己嫌悪に浸っていると、不意に可愛らしい女の子の声が上から聞こえてきた。また変なすれ違いとかでギーシュん時みたいになりたくないと思った俺は、最初は寝てる振りでやり過ごそうとした。だが、俺が寝てると思ったのだろう、体を揺さぶり始めた。この状態で起きないのも不自然なので俺は仕方なく目を開けた。

「あ、おきたのね」

「……は？」

裸だった。

いや、俺がじゃない、目の前の少女がだ。

あまりのサプライズに演技が上手いと評判の俺でさえ一瞬セイバーの真似をしていることを忘れそんな間抜けな声を出してしまった。

そう、そこには全裸の青髪の美少女がいたのだ。

いかんいかん、欲求不満らしい、妄想まで見えてしまったか。もう一眠りでもして頭を冷やそう。

「ちょっと、おにいさん、寝ないで欲しいのね」

俺が目を瞑るとまたしても揺さぶられた。もしかして……妄想じゃないのか？　そう思った俺はなるべく彼女の方を見ないように目を開けた。

「貴方は何者ですか」

俺がそう聞く。すると、きゅいきゅい、と、どういう原理で出しているのかわからない声を上げて喜び、自己紹介を始めた。どうやら名前はイルククゥと言うらしく、タバサの妹らしい。

……うーむ、どう見てもタバサのほうが先に生まれたようには見えないんだが、まぁ、本人が言うんだから本当なんだろう。

さて、このイルククゥ、どうやら遊び相手が欲しくて俺を探していたらしい。何して遊びたいんだと、参考までに聞くと、一緒に空を飛びたいとか言っていた。まぁ、何かしらの比喩表現なんだろうが。

何でも今、おねえさま――――タバサが居なくて暇になった彼女は、

最近タバサが話してくれる俺んとこに遊びに来たらしい。

何故、タバサが俺の話をしているのか、そして、話をよくするからといって何故俺のところに来るのかと突っ込みたいことはあるが……一つ言おう、何故『全裸』なのだ！　下着すら付けていないのは何故だ！　しかも男の俺の前で何故平気で居られる！　……まさか、俺は男ではないと？　……本気（マジ）ショックですね。わかります。

と、俺のどうでもいい話は置いといて、取り合えず布かなんかで体を隠すだけでもいいから何か着せないとヤバイ事になる。

「早く探さなくては」

俺はそう呟きながら、周囲を見渡して布を探す。

しかし、こんなところに布があるはずもなく軽く絶望に浸っていた時だった。

見つけた。見つけてしまったのだ。

と言っても布ではない。

「シエス……タ？」

「アルト……さん」

なにやら気まずい雰囲気が漂うのが感じられた。

いや、これはね、違うんだよ？　分かってよ。

だって、だって……

この状況で何を弁解すればいいんだー！

俺の人生オワタ……と軽く燃え尽きていると、シエスタちゃんから帰ってきた言葉は俺の予想外の言葉だった。

「何でミス・タバサの使い魔さんが此処にいるんですか？」

はい？　何を言っているんだいシエスタちゃん。あのドラゴンのことですか？　そんなのこんなところに居るはずないじゃないかと後ろを振り向く俺。

「……」

「きゅい？」

居た。なぜか俺の後ろに立っていた。首を傾げながら。

何時の間に！？　ってかイルククゥは！？　まさかあの格好でどっかいったのか！？

ヤ、ヤバイ……これは非常にヤバイ。少し話しただけだったがあの子は精神年齢が低すぎる。

もしあの格好で誰かに会って、何してたのかと聞かれたときに俺と『遊んでた』なんて言ってみろ、俺はまさにジ・エンド。な、何としても奴を見つけて服を着させなくては！

「すみませんシエスタ。事情は話せませんが、私には行かなくては

いけない所があるのです」

「……やはり、行くのですか……だからミス・タバサの使い魔さんなのですね」

うん、何も訊かないでくれてることは感謝してるんだけど、何で知ってんの？　俺がイルククゥを探しに行くことを。

……もしかして見てた？　マジかー、そうだよな、そうでなければそんな言葉出てくるはず無いもんな。はい、オワタ。既に嫌われてるっぽかったのに、これは決め手ですな。完璧にシエスタちゃんには嫌われただろう。

シエスタちゃんは優しいから今も笑顔で接してくれてるけど、きっと無理しているに違いない。ふふ……変態は静かに去るとしよう。

「さようならシエスタ、もう貴方と会うことは出来ないと思います。だから……どうか（イルククゥの事は）忘れてください」

「え……？　そ、そんな……何でそんな事を言うんですか！？」

「さようなら……」

何故かシエスタちゃんが泣いているがこっちが泣きたいさ！　もう、恥ずかしすぎて彼女の顔を見て話せそうに無い。

その場にへたり込むシエスタちゃんに何故か罪悪感の湧いた俺はその場から逃げる為に後ろを向いた。するとこのドラゴン気が利くようで俺に背中に乗れというようなジェスチャーをしてきた。

俺は一瞬躊躇したが後ろですすり泣く声が決め手となってドラゴンの背中に飛び乗った。

はぁ……取り合えずあの子を探そう。

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（中編）（後書き）

明日、Ｆａｔｅの映画見に新宿に行ってきます。ヤバイ楽しみでめっちゃ興奮しています。面白いと良いな。

ではまた会いましょうノシ

追記：シエスタ視線と、アルト視線の位置を入れ替えました。ずっと最後に入れ替えるつもりだったのに１２時に出すことに気を取られ忘れていました。ごめんなさい。

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（中編その二）（前書き）

あまりで気がよろしくありません。その上短いです。後編への繋ぎの話だと思ってください。更新期間が結構開いたのにごめんなさい。

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（中編その二）

前から思っていたんだけど、ドラゴンって本当にいたんだね。うん、きっと、軍事用に遺伝子操作されたトカゲに違いない。

ブルブル、おそろしや。

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（中編その二）

［Ｓｉｄｅ：イルククゥ］

私は最近気になる人がいる。

それはおねえさまが此処暫くの間、よく話してくれる一人の使い魔のことだ。何とその人はお姉さまの秘密を知っているのだという。しかも、おねえさまの味方になってくれるらしいのだ。

これは一目見なくてはいけないと思った私はその目的の人物、アルトに会いに行くことにした。空を飛んでそれらしい人を探していると黒髪に白い鎧を着た人を見つけた。おねえさまに教えてもらった条件に一致することからきっと彼がアルトなのだろう。

私は彼の近くに降りると、人間に変身した。アルトさん――――おにいさんは私が韻竜だと知っているだろうとおねえさまは言ってい

たが周りに誰がいるかわからないので人化したのだ。

話を戻して、私は彼の近くに移動すると話し掛けたみた。でも、彼は寝ていたので何とか起こしてお話をしてみることにした。といっても自己紹介をした程度で終わってしまったけど。

なぜかというと、私がおにいさまに一緒に空を飛びたかったので元の姿に戻ったところでタイミング悪くメイドがやってきたからだった。

お兄さんとメイドさんはなにやら難しい話をして嫌な雰囲気になっていたので、お兄さんを背中に乗せてあげた。そしてどうしようかと思っているとお兄さんは良く分からないことを言ってきた。ただ、青髪とか何とか言っていたのでおねえさまのことだと理解した私はおねえさまのところに向かって飛んでいくことにした。

行く途中、おにいさんは凄い人だと聞いていたので大丈夫だろうと思って自由に飛んでいたら、おにいさんが落ちていってしまったので慌てて追いかけて助けてあげた。

おにいさんが気分悪そうな顔をしていたので一先ず降りると私を鋭い目線で叱ってきた。正直食べられてしまうんじゃないかと思ってしまうほどの怖さだった。そんなお兄様に怯えていると、不意に遠くの方からおねえさまの匂いと何かが爆発するような小さな音が感じられた。

――――おねえさまが危ないのね！

直感的にそう理解した私はお兄さんと乗せるとおねえさまのところに出来る限りのスピードで向かった。そこにはやはりおねえさま

がいて戦闘の真っ最中だった。

でも、ゴーレム相手にすることなど出来ないしどうしようと思っていると、不意に背中が軽くなるのを感じた。

また落としてしまったかと下のほうを見るとどうやら違ったようだ。お兄さんは見えない何かを手に握って無謀にもあの大きなゴーレムに向かって飛び降りていたのだ。

何故だろうか？　と一瞬思ったが直ぐに意味が分かった。彼のご主人様が今まさに殴り潰されそうになっていたのを見て助けに飛び降りたのだ。こんな高さから落ちて大丈夫なのかと思ったけど普通に着地すると見事にあのゴーレムから自分のご主人様を助け、そして、次の瞬間にはあのゴーレムを破壊していた。

おねえさまが自分のことのように自慢するのも分かる。彼は凄い人だ。

おにいさんならもしかしたら本当におねえさまを救ってくれるかもしれない。そんな事を思いつつ私はおねえさまの元に着地した。

［Ｓｉｄｅ：アルト］

俺は今、何処とも知れない空を飛んでいた。ドラゴンの背に乗って。

でも、皆が想像しているような優雅なもんじゃない。

――――だ、誰か助けて！

俺は今このドラゴンから落ちないことに必死だった。下の景色を眺めたりとか、そんな余裕は無い。大体雲の上だから景色など見えないし。

そんなことより、なんで俺を背に乗せているのに一回転とか急上昇とか左ひねりこみとかするの？　馬鹿なの？

まぁ、所詮はトカゲ、知能が無いのだろう。

と、冷静な思考で誤魔化そうとした俺だったが、無理だった。ずっと鱗の隙間みたいなところに指を引っ掛けて何とか凌いでいたがもう無理。

ズルッ

そんな擬音が鱗から聞こえたと思うと、俺は下に向かって落下していった。あのドラゴンは未だに俺が落ちていったことに気づいていないのか、きゅいきゅい言いながらロールバレルしていた。

――――あ、俺死んだな。

と一瞬思った俺だったがあのドラゴン、どうやら俺が居ないのに気づいたのか遥か上空から猛スピードで降下してくると、あと少しで地面に激突しそうな所ギリギリで助けてくれた。

そして、そのままドラゴンは地面に着地したので、俺はもう二度

とドラゴンには乗らないと決意しながらこのトカゲから降りた。

「……次私を落とすようなことをしてみなさい？　ただでは済ましませんよ？」

おっと、黒い気が出てしまった。まぁ、でもコイツも言葉が分からないはずなのにビビってるし許してやろう。何も考えずにこいつの背に乗った俺が馬鹿だった。

俺はイルククゥが何処にいるか上空から探そうとしただけだったのに、こいつ言葉がわからないからイルククゥを探せって言っても首を傾げるだけだった。だからジェスチャーで分からせたんだが、こいつ分かった振りしてただけなんだな……。マジ最悪だ。

どんよりとした気分でどうやって帰ろうかと思っていたらドラゴンが急にそわそわしだした。どうしたのだろうかと思っていると、背に乗れと言うジェスチャーをしだした。

勿論拒否したんだが俺を口でくわえると抵抗する俺を無視して背中に放り投げた。何するんだ、と言う俺の抗議もスルーしドラゴンはまたしても空に舞い上がった。今度はさっきのように高度は上げず低空を猛スピードで飛ぶ。勿論その間俺は必死にトカゲの首にしがみ付いていた。

一分程その状態で飛んでいると、なにやら変なものが見えてきた。そしてそれが何かに気づいた俺は、多分人生でも最高クラスに驚いた。

———ガ、ガンダム！？

そう、そこにいたのは土製のガンダムだったのだ。

あまりの驚きに一瞬我を忘れる。イギリスってこんな技術を持っていたのか、きっとこれの名前はＧＵＮＤＡＭ－Ｓｏｉｌ（ガンダム－ソイル）に違いない！

とか興奮していて気が抜けてしまったのだろうか。

ズルッ

――あ、あれ？　デジャブ？

嫌に聞き覚えのある擬音と共に俺はドラゴンから落ちていた。

これは慣性の法則と言っていいのだろうか？　取り合えず落ちた俺は斜め前に向かって落ちていく。森の中に落ちればまだ生還する確立は高かっただろうが俺が落ちてゆく先にはむき出しの地面。ヤバイと思った俺だったがあることを閃いた。

この剣であの風を出せばいいじゃんと。そう思って剣を抜いた俺は、あの言葉を言おうとしたんだが――――判断が遅すぎた。言葉を言う前に俺は地面に到着したのだ。

――――あ、今度こそ、死んだ。

と思っていた時期もありました。

俺は拍子抜けした。なぜなら俺は地面に着地していたからだ。

――――う、うそーん……

何故だろう。結構な高さから落ちたはずだが体の異常といえば足が衝撃でしびれているぐらいで、命に別状は無いようだ。それと、前から思っていたんだけどこの剣を持つと左手が光るのは何でだろう。疑問しか浮かばないな、おい。

まぁそれは置いといて、取り合えず決定事項としてあのトカゲをボロボロに半殺しにした後で動物園に売り払ってやる事は今此処に決定した。

そんな事を思いつつも、助かったと思った俺は、安心してホッと溜息をつこうとした。だがそれは、右から迫るくるガンダムの拳によって中断させられた。

――――ぎゃぁぁ！？

必死に剣を前に出して盾にして直撃は防いだ俺だったが、質量の差がありすぎた。次の瞬間には、後ろにあった何かと激突しながら一緒に吹き飛ばされていた。

着地から吹き飛ばされるまでの所要時間、僅か一秒。

人間技では無いと我ながら驚いたが、きっとこれが火事場の馬鹿力というやつだろう。

凄まじい砂煙の中、そんな分析をして現実逃避をしていたがガンダムは容赦などしない。もう一度拳を振り上げた。

――――こ、こうなったら！

何とか倒れなかったがあまりの威力に両腕共にひびが入っているようだ。流石に次は防ぎきれない。俺は一か八かあの言葉を紡ぎ始めた。

「風よ――――」

剣から送り込まれてくる情報に身をゆだねて、剣を下に向け下段に構える。剣が砂煙を巻き込みながら風をためてゆく。そしてそれを、

ためて、

ためて、

一気に解き放った――――！

「――――吼えあがれ！」

強風で煙が一気に晴れる。そしてその風は勿論煙を飛散させるだけにはとどまらず凄まじい勢いでガンダムに直進すると上半身を粉々にした。

ふー、今回も凄い力で剣先がぶれたけど的が大きかったから何とか当たったな。とか分析していると目の前にいるフードを被った奴が俺に向かって怒鳴ってきた。

「一体何なのよ貴方は！」

いや、そんな事を言われても。うん、無視しようああいう奴は自分が無視されるのが一番ムカつくはずだからな。わざと聞こえてい

ない振りでもしていよう。

俺はそう結論してフードの奴に背を向けて立ち去ろうとすると目の前には何故か目を見開いたルイズさんがいた。

あ、あれ……？　何でいるんすか。

ちょっといやな沈黙が流れるわけですがそこは俺クオリティー。現代っ子でこういう空気に耐えられない俺は適当に何か言って誤魔化すことにした。

まぁ、きっと真面目に格好付けて言えば相手も勝手に分かってくれるだろう。

「サーヴァント・セイバー、只今参上した」

第五話『早くもフーケ編に突入するようです』（中編その二）（後書き）

次回、ストライクエアの使用条件的なものが出ると思います（多分）

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（後編）（前書き）

ゴールデンウィークに入ってちょっと暇が出来たのでうｐ（言い訳）
ってか前回の投稿が二月とか、間隔開きすぎワロタｗ
ごめんなさい（汗）

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（後編）

今更だけど俺がいなくなった後の劇ってどうなったんだろう。

そんな事を思う今日この頃。

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（後編）

［ｓｉｄｅ：ルイズ］

死ぬと覚悟した直後に見た光景はあまりに暖かなものだった。

「サーヴァント・セイバー、只今参上した」

その言葉が私の胸に染み渡っていく。

アルトが来てくれた。

とても嬉しかった。こんな私なんかのために。ただただ嬉しかった。彼が来てくれたのだから何もかも上手くいく。結局私自身がフーケを捕まえると言う目標は達せれなかったけど、もうそんなことは気にしていない。改めてアルトの顔を見たら一気に悩みがなくなってしまった。

嬉しすぎて思わず泣いてしまった私のことを案じてか、今まで見たことの無いような慌てぶりで必死に私を宥めようとするアルトを見る。思わず笑ってしまった。優しくてそれでいて怒っている表情だった。まるで心配させられた最愛の人でも見るかのような。

『またな、セイバー』

『ええ、また合いましょう、マスター』

私の頭に一瞬よぎる夢の中の物語。美しい少女と一人の青年の永遠の別れ。

もしかしたら彼が私に尽くしてくれているのは、私を通して彼女を見ているからではないのか。そんな思考が頭の中で展開されそうになるのを無理矢理引っ込める。

――――私は……アルトを信じるんだ！

と、ここで私達がまだ先頭の最中だったことに気づく。私とアルトは再び錬筋されたゴーレムに向き合った。

アルトは当然の如く私を庇うように前に出ると、平然としたそれでいて緊張感のある顔でゴーレムに向かって走っていく。そのスピードはまるで人間のものではなく、改めて彼が凄い存在なのだと認識させられた。

でも何かがおかしかった。確かに動きはいつも通りだ。だけどあの強力な風の魔法を一向として使わないのだ。

――――魔力が足りない？

確かにアレほど強力な魔法ならば相当な魔力を使ったはずだ。私はそう結論すると迷わず行動した。相手の繰り出した衝撃に耐えられず此方に飛ばされてきたアルトに近づく。恥ずかしくはあるけど、彼になら嫌じゃないと思う自分もいることに気づいて見る見る自分の顔が赤くなっていくのが分かる。

結果としていつものようなキツイ言い方をしてしまった自分に軽く落ち込んでしまう。でも、そんな悩んでいる時間なんて無い。

私は口付けをした。

だけど――――

私は甘く見ていた。彼のような高次の存在を呼び出すと言うことを。

「実は私に架せられた封印は魔力の封印を合わせて全部で三つあるのです」

ギーシュとの決闘の時の話を持ち出してきて何事かと思ったら、そんな事を話し出した。魔力の制限だけでなく実は彼には魔法の使用制限まで架せられていると言うのだ。

三つも封印がある状態でこの強さなんて……。彼は一体どれだけ強いのだろう。

もし彼が全力で戦えたのならばトリステインなんて1週間程度で制圧できるのではなかろうか。まぁ、彼ならそんな事はしないだろ

うが。

そして最後の封印のことを話そうとすると途端に口を閉じた。

――どうしたんだろう……？

途中まで声が出掛かるのだけど、そこからまるでいきなり声を失ったかのように声を発さない。次第には汗も噴出してきた。逢ってから今までいろんな事があったけどどんな時にも汗一つかかず、平然としていたアルトが冷や汗をかいている。

私は途端に不安になった。アルトでさえ声に出すのも恐ろしくなるような封印とは何なのか。大人げも無く残りの封印のことを催促する私に辛そうな、そして悲しそうな顔を見せる。

そして彼は私に告げた。悲しい封印と言う名の過去を――

［Ｓｉｄｅ：アルト］

「ア…ルト……」

「……」

気まずい。

非常に気まずい。

何がとは言えないけど何か気まずい。いや、だってルイズはこれでも美少女。

見詰め合っていたらそりゃ気まずいでしょ。

マジでどうしよう目にも涙が溜まってきたし、どうすればこの窮地を退けられるのか。そんな事を考えて半ば混乱しているとルイズが先に行動した。今にも溢れ出そうな涙を腕の布で拭き取り立ち上がり、

「こ……の、いぬぅ……アルトの癖…に来、るの、が遅いのよ！」

そしてそう言うとその細い腕で俺の胸をポカポカ殴った。全然痛くなかった。

全然痛くないんだが萌え死にそうになった。心に９９９のダメージって感じだろう。俺はオタクではない、だが今回ばかりは顔をふにゃけさせて、萌え～！　っとつい叫びそうになった。何とか顔をしかめさせて耐えたが、気づかれていないだろうか。

「ごめんなさい……」

叫ぶか叫ばないか心の中の天使と悪魔と戦っている時ルイズが不意に謝ってきた。何に対しての謝りだかわからないが取り合えず許すとだけ言っておいた。するとまた目に涙を浮かべだした。なんで！？　許したのに！！

俺が焦って宥めようとすると今度はにっこり笑って、アルトでも焦ることがあるのね。とおっしゃいました。

女ってよく分からない。

と、俺の女の子の気持ちが分からない馬鹿の話は置いといて、ルイズが後ろ！　と叫んだので後ろを見てみるとガンダムが居た。

あるぇー？　ガンダムさっきふっ飛ばさなかったっけ？

そんな事を思っているといつの間にかやってきていた赤髪巨乳さんがタイミングよく説明してくれた。

話から推測するにどうやらあのガンダムは時間があればまた作れるものだったらしい。

めんどくさ。

だがな……無駄なのだよ。

お前に足りないものは、それは〜　情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ素早さ！

そしてェなによりもォ———

必殺技が足りない！！

ふはははは！　俺のあの風でドカーンとなる技で吹き飛ばしてくれる！

……

……

…

――――ひいいいいい！！

そんな事を思っているときもありました。結論から言おう。どうやら俺はあの風が使えないらしい。何とあの風は一日一回しか使えないっぽい。

なぜ分かるかというと頭に情報が届くから。何か頭がパーな人みたいだが、本当に届くんだこれが。何で今更そんな事いうんだ、もっと早く言ってくれよと思った。今更だけど。

そんな悠長に考え事をしているとその隙を狙って鋭いパンチがガンダムから繰り出された。
何とか剣で受け止めてみたが耐え切れず吹っ飛ばされてしまった。
マジ痛い、と心の中で弱気を吐きながら起き上がるとそこにはルイズの顔があった。

「ちょっとじっとしてなさい」

そしてルイズはそう言うと俺の顔を両腕でロックすると顔を赤らめた。えっこれって……。

「べべべべ別に、あ、あんたの事が、すす、す好きとかそういうことでするわけじゃないんだからねっ！！　かか勘違いするんじゃないわよ！！」

「ちょっルイ――――」

チュッ

何という美しい響きだろうか。唇と唇が重ねあう音が鮮明に聞こえてきた。そう俺は今キスをしている。だが唯のキスではない。そうあのナルシストの時と同じディープキスもどきだ。

何でルイズは俺にキスをする？　俺のことが好き？　いやいや無いだろ。昨日今日あったばかりの男を好きになるはずが無いし、何より俺の見立てではルイズの想い人はあのナルシストだろうしそれは違う。本人も違うといっていることだし。

とするとこのキスに意味があるという可能性が大きいな。大体こんな非常時にすることではないしな。

一体何の意味がある……うん？　ルイズ口の中怪我しているな。血の味がするもん。まあ口の中ぐらい切るだろうこの戦いの中……じゃ……。

あれ……？

血？

どっかで――――

『私はこの世に現界しているだけで魔力（やる気）の大半を費やしています。そのため常に私の魔力は空の状態に近い。これでは（警察に見つかった時の）戦闘に支障が出てしまいます。然らば、足りない分は然るべき所から補給するのが定石でしょう？』

『それがつまり私。魔力は血が最も多く含まれているから……とい

うことね』

えっと……ま・さ・か

信じたくない結論に達した時丁度ルイズの顔が俺から離れた。キスの時間はディープもどきといっても１０秒ほどはしていた。

この年頃の女の子には恥ずかしいに決まっている。ルイズは顔を真っ赤にして俯きながら二歩ほど離れた。

そして俯き加減はそのままに俺と視線は合わせず慌てながら指をガンダムに向けて叫んだ。

もしかしたら予想と違って俺が好きだからという可能性も――――

「こここれで魔力は回復したでしょ！　あんな奴さっさと倒してきなさい！　あんたのあの風の魔法ならあんな奴いちころよ！」

ありませんでしたね。それは嘘ですごめんなさい。ほんとにごめんなさい。

……やべぇ。マジでヤバイ。この子が純粋な子であることを失念していた。つまりは口を切って俺に血を飲ませていたということか……。俺はなんていう嘘をついてしまったんだぁぁ！

……マジで後悔先に立たずだな……

目を泳がしながらふと目をルイズに向けると俺が今のキスで全快していると微塵も疑っていない無垢な瞳があった。俯き加減からの恥ずかしそうな上目使いという最強コンボでのお出迎えだった。

――――心が痛いいいい！！！

おれは思わず視線をそらしてしまった。勿論目は泳ぎっぱなしである。女のこの方からキス、しかもディープなんて凄く勇気が必要だっただろうに俺は……。

「？　どうしたのよ？　もしかして血、足りなかった？」

だが今更嘘でしたなんて言えないし……やっぱり全力全開……いや全力全快！と言ってガンダムに特攻するべきなのだろうか……？

それは死ねるよ、マジで死ねる。

「ア…ルト？　ほんとにどうしたの？」

いや、どうもしないんですがね。どうもしないから問題なわけで。

ヤバイヤバイヤバイよ！　このまま何もしなかったらロリっぽい貧乳美少女に嘘ついて猥褻な行為をした変態として捕まってしまうよ！！

打開策を頭の中で展開してる最中もあのガンダムの猛攻は止まない。何とかルイズを抱えながら逃げ回っているがどうしよう。

そんな答えの出ない問題に若干絶望感を味わっていると奈落のそこに落とす言葉がルイズさんの口から放たれたのであった！

「私は血でさえ満足にあげられないなんて……お母様たちに顔向けできないわ……」

止めてくださいよホントに涙目でそんな子と言うのは反則でしょ貴方はウルウル犬ですか！？

もうこうなったら嘘に嘘つくしかない。嘘がばれないようにさらにまた嘘をつきその嘘をがばれないように更なる嘘をつく。やがて取り返しのつかなくなったぐらい嘘が肥大化してもう誤魔化しようが無くなって結局ばれる。そしてその人の人生はどん底に……嫌なスパイラルだ。

だが、ここで彼女に本当のことを言ってしまえば彼女が傷つくし俺も傷つく！　そう俺はみんなの幸せのために嘘をつくんだ！　俺には嘘をつく勇気があった。唯それだけの話だ！（現実逃避）

「ルイズのせいではありません。私の問題なのです」

「え？」

ルイズを背中に背負いながらゴーレムから逃げ回る。

それにしても人を背負いながら剣を持つと言うのは凄まじく難しいことを学習した。一生知りたくなかったけども……。

「私がギーシュと戦闘をした時私がギーシュにこう言ったのを覚えていますか？『魔力の封印のせいで普段は貴様に劣るが、魔力さえ満ちているのなら貴様如きに劣る事はない』と言った言葉です」

「……ええ、そういえばそんな事を言ってたわね」

「実は私に架せられた封印は魔力の封印を合わせて全部で三つある

のです」

そこで一拍置いて再度嘘話を展開する。

「一つは魔力の封印。二つ目に奥義の使用回数の制限。この奥義の使用制限のせいで私の奥義、ヴァーティカル・エアレイド（勝手に命名）……つまりギーシュを倒した竜巻の事ですが、その竜巻は一日一回と言う制限を掛けられています」

「と言う事は今日はもう使えないと言うことね……」

「そうです」

ルイズが気落ちした声色でそう言った。嘘には多少の真実を。その言葉通りにやっているからか、それとも、ただ単にルイズが純粋だからかはわからないが、完全に騙されている様子である。

正直、この娘の将来が心配になる今日この頃だった。

「そして最後に三つ目」

ガンダムパンチをギリギリで何とか避けてガンダムとの距離を離すと一呼吸置く。

そして俺は三つ目をルイズに告げるために口を開いた！

とここで思った。

あの竜巻が使えない理由話したんだから三つ目いらなくネ？　……と。

「……」

「ちょっとどうしたのよ。最後の封印て何なのよ」

俺は答えることが出来ない。封印は一つか三つのいずれかだろうという俺の中にある先入観からなんとなく三つと言ったが……三つ目を考えていなかった……。

俺ってほんとに馬鹿だなと思ったが、考えて欲しい。

例えば自分で小説などの物語を書いている途中に封印の話がでてきたとする。世間一般の人たちは封印を二つなどと言う半端な数にするだろうか！　否！　断じて否！　そんなはずは無い！

まぁ、そんな事言ったって意味は無いんだが言わなきゃやってられないんだもん。

だもんとか言っちゃった。

取り合えず何か言っておかなくては……。

俺……全ての嘘がばれた時どうなるんだろう。

そんな嫌な未来予想図を脳内に展開しながら俺は更なる嘘を告げた。

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（後編）（後書き）

お久しぶりです　ノシ

いや～間隔開きすぎて申し訳ない！リアルが忙しすぎる！なるべく投稿間隔は開けないようにしたいですがどうなることやら（汗）

ここで話を変えて、文中に出てきた『嘘をつく勇気』この勇気って言葉は便利で卑怯な言葉ですよねー。だってなんにでも最後に勇気って付ければなんかホントはやりたくないのにしかたなくって感じになりますもん。

例を挙げますと……

・殴る勇気
・盗む勇気
・太る勇気
・虐める勇気
・泣かせる勇気
・嫌われる勇気

どれもこれも勇気という言葉を付けると正当化されます。ぜひ皆さんも日常でお使いください（笑）

最後に、今後の話の展開はオリジナルにしてもよろしいでしょうか？元々あるレールの上にそって書いているとあまり面白くないんですよね。ついつい自分で話を考えたくなってしまうんですよ。

もし良かったら一言で良いんで良いか悪いか答えてくださると幸い

です。

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（後編その二）（前書き）

ねぇ、フーケ編なんでこんなに長いの？　自分で書いていて不思議なんだけど……（汗）

今回はノリで書いたのでなんか文が崩壊気味。前後の会話文と説明文が意味不明のところとかあったら報告お願いします。

……う～む、今回の話は自分で贔屓目に見てもあまり面白くない。

まぁ、次でフーケ編を終わらせればまたネタもひらめいて面白くなると思うのでそれまで末永くお待ちください。

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（後編その二）

今更だけど、俺のカツラって一体ドコに行ったんだろう？

別にいらないけど、できれば残念な髪の持ち主の元に渡ってその人物を幸せにしてやって欲しいと思う今日この頃。

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（後編その二）

［Ｓｉｄｅ：ルイズ］

「私には一人とても大切な人がいました」

アルトが最初に告げた言葉はそんな言葉だった。途端に頭に回想される儚い恋の物語。私の夢の中に出てきた一人の少女と一人の少年の別れの物語。

最初に連想されるのは、オレンジ色の太陽の光と白い花が咲き誇る丘。

夕日の光が当たりオレンジのような、それでいて黄金色のような幻想的な色に光を放つ透き通るような金髪、限りなく澄んだ美しい碧眼。少女のようでいて厳格な――――王者の雰囲気をかもし出す少

女。

――――セイバー

もう一人の主人公……アルトはそう言った。そしてアルトが私に言った言葉。

『サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上した。問おう……貴方が私のマスターか？』

今まで何故彼がセイバーと名乗ったのか分からなかった。

でも……彼にはそれしか記憶が無かったのだ。私に召喚されることによって様々な制約を受け、終いには最も大切な、自分の存在の証明である『名前』をなくしたのだという。

そしてそれに伴い消えた記憶……その中で思い出せた唯一の記憶。それが最愛の人のことなのだという。彼はきっと無意識のうちに彼女のことを忘れないように彼女の名前をもじって自分の名前としたのだろう。

しかし彼女との過去、それさえも虚しく徐々に薄れ逝く。

それはどんなに辛いことだろう？　私がアルトの立場だったら耐えられるのだろうか？　そのことを聞いてみると、『全て忘れれば悲しみも生まれない』そう言った。

それは悲しいことだ。確かに忘れれば悲しみなんて起きないかもしれない。でも……そんなのってない。自分の存在意義を奪われ、唯一の記憶の愛しの人の記憶も無くす。それはとても不幸なことだ。

本気の恋と言うものを体感したことのない私には結局は理解できないし、してはならないことなのかもしれない。

でも、悲しすぎるじゃないか。彼女の事だけは忘れさせてはいけないそう思った。でも、それと同時に忘れて欲しいと思った私がいることに私は驚いた。

何故だかわからない。覚えていて欲しいけど忘れて欲しい。

そんな二律背反なこの気持ち。――――これは何なんだろうか。

［Ｓｉｄｅ：アルト］

静かに流れる風、その風によって震える木々達。俺の今までの人生の中でここまで気まずいと言うか、緊張感のある場はあっただろうか？　いや無かったに違いない。

冷や汗を額から垂らし、徐々に口を開ける俺。

目の前のルイズはごくりと唾を飲む。俺はそんな真剣な目で見てくるルイズに少なくない罪悪感を感じながら口を開ききった。

「私には一人とても大切な人がいました」

まずは悲しそうな、遠くを見る眼差しでまるで過去を回想するか

のようにまずはそう切り出す。

本当は大切な人など別にいない。まぁ、家族はやっぱり大切だけどこの言い方だとまるで恋人がいたって言ってるみたいだから除外。今まで何人とも付き合ってきたけど命を掛けてもって言うような人は出来なかったし……やっぱりいないな。

どこかに家庭的でおしとやかでちょっとエロくて可愛い女の子落ちてないかねぇ。メイドのコスプレとかして甘えてきたりしてね。

とか妄想しつつも話を続ける。

「彼女の名前はアルトリアといいます」

「アルトリア……」

ルイズはその名前を聞くとなにやら考え出した。そして気づくとぱっと顔を上げて此方を向いた。

「名前が———」

「似ているでしょう？」

「……」

思ったと通りの言葉を返してくるルイズに俺は空を見上げ悲壮感を出した表情で答える。俺の演技に中てられたのか、ルイズは暗い表情を作った。

そんなルイズの様子に罪悪感で胸が痛むのを我慢して俺は嘘を続

ける。

「実は私のルキウス・アルトリウス・カストゥスという名前は本名ではなく彼女の名前からとってあの時咄嗟に答えた名前なのです」

「……でもそれが封印と何の関係が？」

神妙な顔つきで俺に聞き返してくるルイズ。……止めてくれその純情な瞳！　思わず自殺したくなるから！

とか何とか心の中で思いつつ言葉を返す。

「私の最後の封印は自分の名前なのです」

「名前？　名前なんか封印して何の意味があるというの？」

まぁ、そりゃそうだろう。名前封印とか意味わかんねーもん。ってか今更だけど封印なんて信じるなよ。ほんとにこの娘いつか詐欺られるぞ。

「私の宝具――――この剣のことですが、この剣は真名を開放することにより一時的に強力な一撃を放つことが出来るのですが、私にはこの剣の名前が分かりません。それは私の名が封印されてわからないことによる弊害なのです」

難しい顔で考え込むルイズ。俺もそれに習い申し訳なさげの顔で言葉を続ける。

「それに……この封印は名前と同時に私の記憶も奪っていった……覚えていたのはアルトリアのことだけ。それも今ではもう殆ど思い

出せなくなってきました……」

俺は元々Ｆａｔｅの事はよく知らないので、もし過去の話とか聞かれたら咄嗟に答えることが出来ない可能性が高い。だから、後でアルトリアのことに突っ込まれてもいいように布石を打っておいた。

だが、その言葉はルイズには重かったようで、今までの難しい顔を今度は悲しげな、まるで人生の終わりのような顔にしてしまった。

「……もしかしてそれはあたしのせいなの……？」

いや、すみません。全部嘘ですから。ごめんなさいです。

もういっそ、全てを話して楽になりたい。

そんな事を思った。

でもその反面彼女を落胆させたくないとか、もし騙していたのがばれたら猥褻罪とか暴行罪（ギーシュ的な意味で）とか不法入国とかで捕まったら困るし絶対に本当の事は言えないという思いもある。どちらかと言うと後者が強いような気がしないでもない。

そんないろんな事を頭の中で考えながら一先ず何かフォローの言葉をかけようかと思っていると先にルイズが口を開いた。

「アルトは……忘れていくのが怖くないいの？」

そして放たれたのはそんな言葉だった。

でも実際忘れてるわけじゃないし怖いかと聞かれても……。でも

結局は、忘れるのが怖いと思うのは覚えているからであって忘れればば何とも思わないんじゃないだろうか。

重度の精神的なショックを受けると人間は防衛反応としてその記憶、時にはそのほかの記憶までも含めて忘れてしまうものだ。それは自分を守る為。つまり忘れる事はその人の救いになる。

逆に言えば辛いのは覚えている間だけということになるのではないだろうか？

「全て忘れれば悲しみも生まれないのですよ、ルイズ。辛いのは今だけ。……今だけのことなのですよ……」

そんな格好付けた哲学的な台詞を吐いていると気づいた。……ってか、もし不法入国で捕まった場合強制送還で帰れるんじゃ……？

そんな甘い誘惑に頭を揺さぶられていると俺の正面、つまりはルイズの背後からまたもガンダムパンチが繰り出された。

「ですがルイ――――クッ！」

フォローの言葉を入れようとするのをまたもタイミング悪く止められた俺は一旦話を止め、俺は咄嗟にルイズを抱き上げてサイドにジャンプする。すれ違いざまにガンダムの足を剣で切っておくことも忘れない。これで少しは時間が稼げたと思う。

しかし、結局は時間稼ぎ、倒すことは出来ない。そして、仕切りなおして、やっとのことでフォローを入れる。

「ルイズ……一つ確かなのは、私は貴方のサーヴァント。貴方のお

かげで現界（生活）出来ているのです。貴方には感謝しているのですよ？」

頭ではどうやって倒そうかとか、ってか逃げればよくね？　とか思いつつ、ルイズは俺がお前のサーヴァントだ！　とか、使い魔なんだぜ！　とか言っておくと機嫌が良くなるのは分かっていたのでそこら辺の言葉を適当に言っておいた。

案の定、ルイズは泣きそうな表情を止めて笑顔になった。

そしてその笑顔を無理に怒り顔っぽくするとそっぽを向く。

「……ふ、ふんっ！」

可愛いーな、おい。

顔を少し赤らめながらそっぽを向くルイズ……俺にはあまりツンデレ属性は無いと思っていたが何か覚醒しそうだ。

なんて、新たな属性を会得しそうになっていると赤髪巨乳&青髪虚乳のコンビがドラゴンに乗ってやってきた。

「ルイズ！」

そして、赤髪巨乳はドラゴンが地面に不時着すると同時に凄い勢いで飛び降りるとルイズの名を叫びながら駆け寄ってきた。そして俺の横に立っているルイズに抱きつくと怒鳴り声を上げた。俺もあの胸に抱かれて窒息したいな。

「この馬鹿ルイズ！　死んだかと思ったわよ！」

「ご、ごめんなさい」

いつもなら食って掛かるルイズも流石に空気を読んだのか素直に謝る。何か一件落着っぽい流れになっているところ悪いんだけどさ。さっきから後ろでフードのおねいさんが凄い殺気を出しているんですが……いや殺気なんて分からないけど何か凄い怒っているのはわかったからさ。

「さっきからあんた達は……馬鹿にするのもいい加減にしな！」

なんか、軽く無視されていたのが気にいらなかったのだろうやっぱりむちゃくちゃ怒っていた。その怒りが上乗せされたのかガンダムの再生スピードがどんどん速まる。

「乗って」

ロリっ子タバサがドラゴンの上からそう促した。それに従ってルイズと赤髪が乗り込む。

「アルト？」

だが俺は一歩無動こうとしない。だって乗りたくないもん。転落死なんてしたくないんだもん！

案の定、俺が乗らないことに疑問を覚えてルイズが催促する。

「アルト！　早く乗って！」

後ろのガンダムの再生がもう直ぐ完了しそうだ。ルイズたちもそ

れに気づいたのか若干慌てた表情になる。しかし俺は———

「だが断る」

断った。

「な、なんで！？　いくらアルトでもこのままではジリ貧だわ！」

馬鹿いっちゃいけませんよぉ、お嬢様。このドラゴンには俺は一生乗らない、そう誓ったんだ！　こんな馬鹿な爬虫類になんか今後一切乗らないとな！　乗ったが最後、落とされて死ぬんですよ？　俺はノーロープバンジーの趣味はありません！

「ルイズ……騎士にはやり通さなくてはならない誓いというものがあるのですよ」

落とされそうになったトラウマで乗るのが怖いなんて口が裂けてもいえない見栄っ張りの俺はそう格好つけて言ってみる。

「アルト……」

だが相手も然る者ルイズ。必殺の悲しい顔で俺を見つめる。うぐぅ……止めてくれその眼はぁ！　ってか無理、そのドラゴンマジでトラウマだから！　ほら見て足が震えてるんだよ？　俺死にたく無いもん！

「アルト……私のためにしてくれるのは嬉しい。でも、貴方にもしも死なれたら私は……」

考えてみれば此処に一人残ったところでガンダムにプチュッって

潰されて終わりじゃね？とか考えていたのだが、ルイズがそんな言葉と共に悲しそうな顔をした途端俺の頭の中に電流が走った。

――――え？　何これ？

意味が分からない。何故だか知らないが逆らってはいけないような気持ちが生まれる。

本当はこんなトカゲになんて乗りたくないのに心の奥底からルイズに逆らうなと言ってくる。

「アルト……こんないい方はしたくないけど……命令よ、乗りなさい」

命令。

そしてこの言葉。この言葉がトリガーとなったのか光を強める俺の左手の令呪っぽい刺青。どうなってんすかマ・ジ・で！

マジで乗りたくないんですぅ！　俺は歩いて帰る――――

「命令とあらば……」

日本に……帰りたいです。

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（後編その二）（後書き）

今回はあとがきを使って俺の最近ハマってる音楽を紹介したいと思う。

1、La Libertes　→　七人のオンラインゲーマーズ OP

2、Alchemy　→　Angel Beats！ 挿入歌

3、crow song　→　Angel Beats！ 挿入歌

4、Liberi Fatali　→　FF？ OP

5、why, or why not　→　ひぐらしのなく頃に ED

みんな～この曲を聴きながら読んでくださいね～！

……とそんな事をいっている所で思った。ゼロの使い魔って『魔力』じゃ無くて『精神力』だったような……。

ま、まぁ……今更だし良いですよね？　もう魔力って事で。　うん、今更精神力にしたら文おかしくなるし。

ゼロ魔ファンの皆さんごめんなさい。

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（終編）（前書き）

久しぶりだからなんかうまく書けないよ～？

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（終編）

頭にあの曲が浮かび上がる。

おれのｉＰｏｄの中で最も聞いたであろうあの曲。

てってってれてれれってってってれて♪　てれてれれってってれてれ～♪

懐かしいなぁ、『ちっぱいぱん』

［Ｓｉｄｅ：アルト］

「うむ、ご苦労であった」

今俺達土倉のフー子討伐隊（仮）は学院長室に集まっていた。

結局あの後俺達はフーケとは戦わずドラゴンに乗ってトンズラこいて帰ってきたのだった。途中ロングだかショートだかの秘書の人を乗せ忘れていたことに気づいて戻ったは良いが、結局見つからず帰ってきたという些細なアクシデントもあったが何か任務完了したっぽいのでよしとしよう。

何とかって秘書の人もなんか凄いらしいから直ぐ戻ってこれるらしいし。

まぁ、そんな事を考えているうちに話は進みなんか勲章とかそんな話になったらしい。ルイズ達には精霊勲章とか何とかがもらえるらしい。俺には金がもらえるらしい。内心、勲章なんて名前だけのものより現金の方が嬉しかったりしたのだが、ルイズは俺が蔑ろにされていると思ってか（実際そうだが）学院長に反論していた。

アルトが助けてくれていなかったら今頃この場にはいなかったとか、今回活躍したのはアルト唯一人。アルトだけに褒美が与えられるのならまだしも、逆はありえないとか言っている。

褒美なら現金があるんだからいいじゃないかとか思っていたりするのだけど……。まぁ、貴族じゃないからとか差別されるのはちょっと癪だがそれがこの世界のルールなのだから仕方ないだろ。

そんな事を考えて、未だに凄い剣幕で学院長に迫るルイズに不憫になって……ホントは――――アルトに褒美がないなら私達も要りません！　――――アルト行きましょう！　とか言い出したほうがでかい……だってそうしたら俺ももらえなくなるし。

まぁ、そんなこんなで俺は妥協案を出した。

「ルイズ」

「……何よ」

俺のために怒ってくれていたはずなのに何故俺を睨むのかわからないが、まぁ、ツンデレだししょうがないかな。そんな諦めにも取

れることを頭の片隅に置きながら俺は話を続けた。

「私は祖国でＳｉｒ（サー）の称号をいただいております。ですから他国で新たな称号は必要ありません」

「……貴方やっぱり貴族だったのね」

「……っへ？　……あ。いや――――」

「学院長！　聞きましたか！？　彼は貴族です！　問題ありません！　やはり勲章を与えるべきです！　どうせ知っていらっしゃるでしょう？　彼が凄まじい力量の風のメイジだと言うことを！」

「……ふ…む…」

どうやら、俺の台詞は見事に逆効果だったようだ。いつの間にか俺が何か風の凄い人みたいになっているけど俺は一般人ですよ？　漫画やアニメで言うところのクラスメイトＡ何ですよ？　別に勲章なんか――――

「おぬしの言葉も一理ある……少なくとも風のトライアングルクラス以上ではあるらしいしのぅ……合い分かった、彼の事は私から進言してみよう」

「あ、ありがとうございますオールドオスマン！」

オワタ……手に入れた僅かなお金を使った領地経営フラグが完全に消滅した……いや、領地なんて持ってないからまずそこからなんだけどね？

いやホントは……風俗に行きたかったんです。だってもう数日抜いていないんですよ？　何はとは言いませんがね。そんな俺に対してルイズは無遠慮に裸になるから堪ったもんではないのだ。このままではいつのひにかルイズを――――

なんて自分の煩悩と闘っている間に話は終わったようでキュルケたちが退出を始めた。それに習いルイズも晴れ晴れとした顔で退出しようとしていたので、俺も若干落胆した顔で部屋の入り口に歩き出した。

と思ったら学院長に急に呼び止められた。学院長はどうやら俺だけに用があるらしく他のものに退出を命令する。外はもう夕暮れ時で、部屋に入ってくる赤が部屋を照らし何ともいえない寂しげな空間を作り出していた。

そんなことのせいもあってか俺は日本を思い出してしまった。やはりいくら楽天家の俺でもこんな見知らぬ土地より日本が恋しいのだ。

どうやら俺のそんな心境を感じ取ったのだろうか？学院長は孫に話しかけるようなと、好々爺とした表情で俺に話しかけてきた。

「今回はご苦労じゃったな、アルト君」

「いえ」

「……勲章の事は残念ながら期待しない方が良いと思うのぅ……無力で申しかけない」

「そんな事はありません。先ほど言ったように私は勲章を必要とし

ていません」

「君は欲が無いのだな。ロマリアの神官どもに見習わせたいほどじゃのぅ」

しみじみと言った感じでそう言うと、そこで一旦話をオールドオスマンは止め、今度は好々爺然とした顔付きを真剣なものに切り替えた。それに伴い、俺も真剣な顔になる。

学院長はしばらく自分の座る机に視線を送りなにやら考え込む。1分程だろうか？　それほどの時間が経った後、オールドオスマンはようやく意を決したように此方を向くと口を開いた。

「君の出身地は何処だね？」

正直俺は反応に困った。だってそうだろう？　なにやら深刻な話かと思ったら出身地を聞かれたのだ。少し予想外だったのだ。

しかし、後から思えばその一言が俺を地獄に落とすきっかけのようなものだったのかもしれない。

俺は勿論日本と答えた。学院長はそこは何処だと返した。意外と日本の知名度は低いんだなと思って、中国の隣、台湾や朝鮮半島の近くですと答えた。学院長は中国？　それは何処の国か？　台湾とは何か？　朝鮮半島とは国なのか？　そんな答えが返ってきた。

中国を知らない？　こんな学校の校長になるような識者が？　そんなことはありえない。

そこで浮かび上がるのが必死に心の中で押さえていた言葉だった。

『異世界』

もしかして此処は異世界じゃないかと言うこと、月は二個あるしドラゴンはいるし、リアルガンダムだって存在する。防衛反応のせいか無意識のうちに無理矢理な解釈で此処はどこかのヨーロッパ圏だと思い込んでいた。今思えば無理がありすぎるのだ。

大体何処だトリステイン王国って。大体なんでいきなりヨーロッパにいるんだ。大体なんで此処の人たちはこうも皆日本語が流暢なんだ。

俺はその名の通りこの地に召喚されたのだサーヴァントとして。と言う事は英霊？　そんな事を一瞬思った俺だったがそれは直ぐに否定した。英霊と言う事は死んでいるはずだしまず何より俺は偉業を成し遂げていない。英霊になる要素など１μもないのだ。

やはり俺は――――

「俺は……異世界人？」

「ふむ……私ではなく『俺』ときたか。それが本当の君か？」

気づけば俺はそんな事を漏らし学院長もそんな言葉を返していた。

何だろう。此処一年で一番ネガティブな気分だ。

俺は脳内でルイズの透け透けネグリジェや、ツルッパゲ――――いや、サイドに髪はまだ残っているが――――なあの人の頭に乗った小鳥が滑って落ちる妄想を再生して気分の活性化を試みたが、何の反応もなく、結局はどんどん気分が落ちていくだけだった。

［Ｓｉｄｅ：マチルダ］

（クソッせっかく破壊の杖を手に入れたって言うのに取り返されるなんて！）

そんな事を心の中で毒づきながら私は近くに置いてあったクッションを壁にたたきつけた。クッションは勢いよく壁にぶつかると、ぽふっと気の抜けた音を発して床に落ちた。そんなクッションの間抜けな音に気がリラックスしたのかやっとのことで気分が落ち着いてきた。

と、そこで今日の昼間のことを思い出した。

いった何なんだあの化け物じみたやつは。まず頭に浮かんだのはその言葉。だってそうだろう？　どこの国に２０メイルを超えるゴーレムの拳を剣で受け止めて平気な奴がいる？　どこの国に私のゴーレムを一瞬で粉々にする竜巻を発生させる奴がいる？　いないだろっ！　アレはもはや人間じゃないと言われても信じてしまいそうだ。きっと腕を切り落としてもそこから生えてくるに違いないのだ。

「くそっ……破壊の杖は半年分の仕送りにはなるはずだったのに……！」

———まったく……えらい誤算だよ。

私は溜息混じりにそう言うと頭を抱え込んで困ってしまった。どうしたらいいのだろう。かの有名な破壊の杖ならさぞ高く売れるだろうとの見込みで普段はあまりやらない潜入を使っての盗みだったのに……。此処何週間が水の泡とかした挙句、怪しまれる為にあと何週間かは学院を辞められない。

もう一度盗もうにも、今までと違って教師達が当直を真面目にするようにしたみたいだし、壁を壊せたのは輝が入っていたところによるものが大きい。それに同じ手で盗まれるほど此処の教師陣も馬鹿ではないだろう。

あー……駄目だ駄目だ！　こんな辛気臭い雰囲気で考え込んでたって良い事は思い浮かばない！　夜風にでも当たりに行こうか……。

私はあまりにネガティブな気持ちになってゆく気持ちをリセットする為に庭に出た。

――――舞踏曲？

ふと流れてきた舞踏曲に今日はフリッグの舞踏会とやらの紳士淑女のお集まりがある事を思い出した。それを思い出して私はさらに気分が悪くなるのを感じた。自分がこんなに苦労しているって言うのにと、完璧なる自己中心的な怒りを覚えてしまったのだ。いや、分かっているのだそれは唯の八つ当たりでしかないと。でも、むしゃくしゃしていてもう自分でも何が何だか分からなくなっているのだ。

『人並みに幸せが欲しい』

そんなことが将来の夢になったのは何時からだろうか？　少なく

とも貴族の時にはそんな夢を持ってはいなかった。こんな夢さえ叶えられる気がしない私はもう死んでしまっているのだろうか？　このまま年を取っていけば、捕まって処刑か、一生監獄生活とか暗殺されるとかそんなことしか想像できないのだ。これで生きていると言えるのだろうか？

そう思ったら目から涙が溢れてきた。

――――私だってなりたくて平民になったんじゃない……！　なりたくって盗賊になったんじゃない！！　私だって……私だって！

そんな感情が湧き出してきて、どうしようもなくなって、目の前が涙でかすんで見えなくなって、そして気づいたら誰かに抱きしめられていた。

「……大丈夫ですか？」

――――目の前にいたのは忌々しいルイズとか言う娘の使い魔だった。

第五話『遅くもフーケ編に突入するようです』（終編）（後書き）

皆さんお久！

久しぶりに書いてみました！　更新遅すぎですね……ごめんなさい。

最近は第七次ギターブームが自分に起こっています。

というのも、『学園黙示録　ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ』のＯＰがカッコ良かったので無性に弾きたくなって最近はそれを弾いて遊んでました（汗）

それを弾けるようになると他の曲も弾きたくなるものです、私はその後、『Ｋｉｌｌ　ｔｈｅ　Ｋｉｎｇ』（私はメタル好きです）や『Ｄｏｗｎ　Ｔｏ　Ｔｈｅ　Ｄｅｖｉｌ』も久々に弾きたくなって、それに飽きたらネットで『Ａｒｒｉｖａｌ　ｏｆ　Ｔｅａｒｓ』という曲を見つけ気に入ったのでそれを練習開始。

で、そんなこんなでギターの五弦を酷使しすぎたのかついに切れたのです。それで一気にやる気を削がれた私は気分転換にネットを彷徨っていました。で、たまたま見つけた『なろう』の小説を見ようとしたら、たまたまミスってログインしてしまい、「あっ……」っとなった次第でございます。

（武士語）「まことにかたじけない。夏休みにて刻限は、山ほどあったでござるであると申すに……であるとりあゑず参壱日まにてには、あであるとひいは、上げる所存でござるがにて怒らぬにて願いたもうぞ、（´Д｀；）ノ」

（約）「本当にごめんなさい。夏休みで時間は山ほどあったと言うのに……とりあえず３１日までにはあと一は上げるつもりですので怒らんといて、（´Д｀；）ノ」

最近のマイブームの曲

１、ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ

２、Ｄｏｗｎ　Ｔｏ　Ｔｈｅ　Ｄｅｖｉｌ

３、ぽっぴぽー

４、ツンデレのうた！

５、初音ミクの消失

６、ちっぱいぱん

陸上の記録会の１００Ｍの最終コールの時、俺のウインドブレーカーのなかにあった携帯が鳴った。上の『６』の曲がね！　見事に鳴ったさ！　数秒の静寂の後の役員の冷静な「コール中の携帯はマナーモードにしておきなさい」と言う言葉が俺の心を見事なまでに抉ったね！

結局、後から分かったのだがそれは部員の陰謀だった。マジで部活やめようかと思ったのは今となっちゃ良い思い出……だろうか……。

第六話『だんだん原作から乖離されていくようです』（前書き）

ふはははは！　もう更新しないと思っていたな？　甘いわっ！
アメリカのケーキ並みに甘すぎるわっ！

……――。

もうこれを以前見ててくれた人は此処にはいないだろうけど、言わせてください。本当にごめんなさい。

第六話『だんだん原作から乖離されていくようです』

［Ｓｉｄｅ：マチルダ］

自分の瞳孔がこれ以上ないってくらいに広がったのを感じた。黒い髪に漆黒の瞳、それに相反するように白を貴重としたアーマードタキシード、間違いなくそれはあの化け物だった。

自然と手が震える。何故か彼の瞳が妙に煌いて見えて、闇夜に浮かぶ猛獣の瞳の如くそれは私の恐怖を増幅した。

生きている実感がなかった。存在している感覚がなかった。

私にとっての此処に在るということを証左するものがガラガラと崩れていくようなそんな気さえした。何かに足をとらわれて転びそうになってはじめて自分がいつの間にか背進していることに気がついた。

そして、思い至る。

――殺される、と。

私は服からタクトを取り出そうとした。しかしこういうときほどいつも簡単にできる事が出来なくなるもので、なかなか取り出せない。手がこれだけ震えていれば当たり前かもしれない。

取れるのが遅れれば遅れるほど私は焦り、恐怖した。

一歩――

それだけ、たったそれだけ、彼が私に近づいただけで額からはじっとりと汗がにじみ出た。

そもそも、何故私はここまで彼に恐れているのだろうか……？
彼が私のゴーレムをいとも簡単に吹き飛ばし格の違いと言うものを見せ付けられたから？　私の正体を見破っているぞとでも言うようなその深い瞳にか？　鬼神じみた身体能力にだろうか？

それとも、それら全てだろうか――？

よく分からない。それが私の正直な感情であった。

勿論それら全てに恐怖しているのもあるだろう。しかし、あの時は距離が離れていた事もあってどこか客観的にその事象を見ていた。そこが今とあの時の大きな違いである事は疑いの余地もない。

つまり客観的な立場でなくなったときに言葉とはかけ離れての、漠然とした恐怖。まさに原初の恐怖とでも言うのだろうか。ただ怖い、自分の理解できない強大なものに出会ったときのようなそんな――畏れだった。

ようやく指先に硬いものの感覚が伝わった時、彼は既に目の前に居た。急いで硬いもの――タクトを掴む。そして安堵した私はそれを勢いよく取り出して驚く、タクトが――ないのだ。

確かに今取り外したはずなのに、なのに突き出した私の指にはそれなくて、そして次の瞬間に私は眩暈がするのを感じた。

ぱっと目が合った彼は私に向かって、フッと蔑んだような笑みを浮かべた。そして、右手をゆっくりと持ち上げる。

――こんなの無理じゃないか、勝てるはずないじゃないか。

何時の間に、どういう原理でだか私には到底理解し得なかったが、確かにそこには草木の模様が装飾された私のタクトが握られていた。間違いなく私のものだった。

彼はその場から3メイルほどまでに近づいただけでそれ以上は全く近寄る気配を見せていなかった。だというのに彼の手には、私の愛用しているタクトが握られている。一瞬のうちに私に切迫し、奪い去ってから気づかれないように元の場所に戻ったとでもいうのだろうか。

笑うしかないだろうこれは。でも、私の顔はまるで固まってしまったかのように笑う事はできず、ただ痙攣したように口端が動くだけだった。

やがて彼はゆっくりと上げた杖をそのまま私に突き出した。

荒れ狂う風と、共に降り注ぐ瓦礫。全てを飲み込み一瞬のうちに砂のように粉砕するあの風の魔法が――私の脳裏に録音されていた記憶が再生される。

途端私はどうすることも出来なくなってそのままその場に顔を手で守りながらへたり込んだ。

人間の心理とは面白いものだ、あんなもの喰らったら顔をいくら

腕で守ったって腕ごと肉をそぎとられて、バラバラになるというのは明白なのに。意味がないのに守らなくては気がすまない。いや、これはむしろ心理とかそういうものではなく心の深層の何かによるものなのかもしれない。

そんな事が一瞬頭に流れ、次に、今までの楽しい記憶辛い記憶全てが次々に流れ込んだ。走馬灯の様に、とはよく言ったものだ。

そして――――

私の意識は――暗転した。

［Ｓｉｄｅ：アルト］

ザ、ネガティブ。今の俺の状態を表したとするとそんなところじゃないだろうか。不意に空を見上げると月が二個浮かんでいて、そしてありえないほどに大きかった。

オイ、俺は馬鹿かよってなもんだ。こんなでかい月があるはずねぇべさ。

そんな変な、方言チックな言葉が出るくらい俺は混乱してたし、落ち込んでた。

いや、ね、やり残した事がいっぱいあったんですよ俺には。見たかった小説いっぱいあったし、やってないゲームもたくさんあった。

はぁ、と俺は溜息をついた。そしてもう一度空を見上げる。夜空には去れども忌々しい月は浮かんでいて、俺は、あきらめる事にした。

とりあえず、帰れるようになるまでほっとこう。それよりだ、大変なのは今後の事。アルトという存在についてどうしようかということだ。

いっそのことばらしてしまおうか？

と思考してから、俺は首を振って考え直す。

もし今更、ルイズに今までは嘘だったんだゴメンね？　と謝ったとして、ありえる未来は路上暮らしのホームレス、もしくは性犯罪者という烙印を押され牢屋にまっしぐらかの二択な気がする。なら、口調などはそのままに何とか誤魔化してくという事しか俺には出来ないわけである。

選択肢少なすぎじゃね？　いや、待てもう一つあった、此処から逃げて一人生きてくという選択肢が！

「なんて無理ゲー……」

いやいや、よく考えたら全く持っての無理な話であった。こんな周りが森しかないところに出たら熊とかに教われて普通に死にそうだし、例え順当にに進んで、町に行けたとしても結局はホームレス。

結局は、ルイズの庇護の下ヒモ男として人生を送るしかないのである。

俺はそう結論つけた。

まぁ、ツンデレ萌えに目覚めそうな俺からしたらあそこにならいつまでもいれるし、ヒモって男のロマンだからね……！

なんだ、何も悩む必要ないじゃん。

なんか気分が鳥のように軽くなった俺はちょっと散歩でもするかと庭の方へ歩き出す。

5分ぐらいするとどこからともなくクラシカルな音が聞こえてきたんで、俺は音のするほうに歩いてくことにした。ちょっと真っ暗すぎてびびったとか、そういうわけでは決してない。

しばらく歩くとなんかテラス的なところの下についた。どうやら上ではダンスパーティをしているらしかった。

そこで、そういえば、と思い出す。さっき学院長室から出たときにルイズがいってたな、と。

たしか、ケロッグの何チャラ会があるとか言っていた。しつこく、絶対後で部屋に戻ってきてよね！　と、小動物的な動作でいっていたが、もしかしたらこのことがあるから部屋で留守番していてくれという事だったのだろうか？

…おぅ……これはまずいことをした、これから彼女専用のヒモ男になろうとしてる俺が、そんな事手伝えなくてどうするのだ。彼女に見限られたら俺は終わり、ジ・エンドなのであるのに。

こうしてはおれん！　と思って振り返ったのは良いが、暗いせいだろうか、どうやら俺は道に（ｒｙ

くそ！　明るければ普通に帰れるんだぜ？　ホントだぜ？　俺だって馬鹿じゃ無いんだからそりゃ覚えるさ！　でも、ほら今は暗いからさ――と、ルイズに言うための言い訳を考えながらどうやって帰ろうかと考えてるとだ、何たる幸運、人がおるでは無いか。

しかも女性！

此処の女性は皆親切。それは完璧なる事実であるからきっとこの人も優しく俺にレクチャーしてくれるに違いないだろう。そんな事を考え近づきそして気がつく。

泣いてるだと……。

しかもこの人は、あの美人の秘書官、ショート……じゃない……えーと、ロ、ロ、ロン、そう、ロング・ビルさんではないか。

ビルなんて男らしい名前をしてる割には（色々間違ってます）女らしい一面もあるんだな、とか思って、そっとして置いてあげようかと思ったが、この人に話しかけないと俺は帰れなくて俺が泣いてしまいそうなので痛む心を抑えながら話し掛けた。

まぁ、とりあえず、泣いてる相手に言う最初の言葉は、なんと言っても、大丈夫ですか？　だよな、やっぱ。

関係ないが、大丈夫じゃないから泣いてるのに大丈夫ですかってのも、ふざけんなクソッて感じだよね。いや、まぁ、俺はそれでもそう言うけれども。

俺が大丈夫ですか？　と、そう言うと、そこで俺に初めて気が付いたようで、此方に目線を向けた。

「――！？」

と思ったらその次の瞬間には、目をこれでもかとかっぴろげ、そしてなんか後退って、慌てながら服の中に手を入れた。

が、なんか目的のものが出てこないようだ。

何をそんなに慌てて取り出そうかと思ってるのかと観察してると出てきたのは皆がもってる例のマジック用の指揮棒だった。

しかし、慌てすぎの弊害だろうか、取り出したと同時に指揮棒は無理に掴もうとした指に弾かれ、見事なアーチを描いて俺の足元に落ちた。ビルさんは闇夜のせいで杖の場所を見失っているらしかった。

何やってんだこの人、なんか可愛らしくて俺はクスリと笑ってしまった。ビルさん萌えですよ。ドジっ子萌えです。

まったく……と思って俺は指揮棒を拾い上げた。普段はあのクールそうな眼差しで美人系なのにこうやってギャップをだして男を魅了するわけですね。ビル……恐ろしい子……！

とか脳内ギャグをやりながら、とりあえず所有者に返すべきだろうと思って俺はそれをビルさんに差し出した。

……――。

いや、何やってんすかビルさん。俺思わずそう口に出しそうになった。

そして一言、何気にこの人萌え要素高くね？

第六話『だんだん原作から乖離されていくようです』（後書き）

夜の１２時（０時）になったらもう一本投下する予定なので暇があったら覗いてください。それまでに仕上がらなかったらごめんなさい（汗）

では、以下最近私のはまってるもの紹介。

梶浦由紀の曲全般にはまってます。ニコ動でずーっとと聞いてます（笑）

梶浦最高です！　皆さんも一度は聞いてください。そして出来ればそれを流しながら見ていただけると幸いです。

あまりに壮大で幻想的過ぎるんで、私のギャグっぽい話とは遭わないかもしれませんが、むしろそれでなんか凄い話を見てるような気分になっていただけたら幸いです（笑）

特に好きな楽曲を挙げます。

１位　乙－ＨＩＭＥより、乙－ＨＩＭＥの狂宴（目覚めアレンジ）……最強にヤバイです。ハリウッドの壮大な作品に流れてもむしろ作品が負けそうな、そんな曲。原曲の『目覚め』も勿論好き。

２位　空の境界より、Ｍ１２＋１３、及びそのアレンジ群（Ｍ４０など）壮大すぎる。テンション天元突破。

３位　空の境界より、Ｍ３８＋３９　哀愁に浸れます。

４位　パンドラハーツより、ｅｖｅｒｙｔｉｍｅ　ｙｏｕ　ｋｉｓｓｅｄ　ｍｅ　とにかく好き。

５位　パンドラハーツより、Ｂｌｏｏｄｙ　ｒａｂｂｉｔ　テンション上がる。

第六話『だんだん原作から乖離されていくようです』（中編）（前書き）

まさかの二時間オーバー……遅すぎるぞ俺の指！

なんか、眠くなってきたせいで、書きたかった話と大幅に変わってしまったＯＴＬ

ホントはデルフのくだりになるはずだったのに……クソッ！

第六話『だんだん原作から乖離されていくようです』（中編）

［Ｓｉｄｅ：アルト］

あれから、なぜか気絶してしまったかビルさんを俺はこのまま放置するわけにもいかず、しょうがないので背負って俺は見事に彷徨っていたわけ何だが、なんか見覚えの在るでかい広場に出て、これでやっと部屋に戻れるかも？　とか淡い希望が出てきて、テンションが上がっていると不意に後ろから足音が聞こえてきたものだから、ナイスタイミング！　ッ手名感じで後ろを振り返ったわけだ。

するとどうだろうそこには可愛らしく頬を膨らませた大魔王が――

そこで俺は見蕩れてしまった。思わず口からルイズ……と言う言葉が漏れてしまって急に気恥ずかしくなるのが分かった。

それぐらい彼女は可愛かった。

ピンクの艶々の髪は綺麗にバレッタで纏められ月光に反射し、軽く化粧の乗った彼女の可憐さを更に際立していた。身に纏った純白のドレス、そして肘までである白い手袋をつけたその手でちょこんとドレスのスカートの両端を掴んで此方に向かってくる姿は、まるでどこからから逃げ出したお姫様だと、俺の脳を誤解させる。

明らかに綺麗過ぎた。もはや三次元の存在ではなく、絵画か何かに描かれた聖女がその中から現れたと言われたも、信じてしまえそうであった。

もう何が何だか分からないが、人生で見た中で今のルイズが最も可愛いのはもはや疑うまでもなかった。

「部屋に戻ってきてっていったのに……なにしてるのよ」

目の前まで来た彼女はプンプンと言う擬音が似合う様子で俺にそう問いかけてきた。

今の今まで言おうと思っていた言い訳はいつの間にか頭からは綺麗さっぱり飛んでいて、俺は目を逸らしながら言葉を濁すのでせいいっぱいだった。

と、此処でようやく、何故彼女が此処にいるのだろうかということに俺は思い立った。彼女の格好からしてダンスパーティーに出席していた事は丸分かりである。

留守番していない事にここまで怒りにきたとでも言うのだろうか？

まぁ、でも今の俺にはむしろ僥倖。彼女のツンなんて後から来るデレを百倍萌えさせる為の布石だと考えれば辛くは無い。ならば部屋に戻れることは祝うべき事だろう。

なんて、思ってるとルイズはなんか急に不機嫌になりだして、ビルさんを背負うと言い出した。いや、無理でしょ、とは口には出さない。

まぁ、案の定彼女は潰れてしまったわけだが一体何がしたかったんだろうか？

いや、めっちゃ可愛いから別に行けど。

で、そんなこんなでいつもの通り可愛い挙動をする彼女に萌えていると、急に黙り込んで何と禁断のタブーについて質問してきたのである！

まさに不意打ちを喰らった俺はまともに返す事も出来ず、黙り込んでしまった。

それに不審がったのだろうか？　ルイズは表情を険しくさせた。

いや、あのですね、いきなりそんな事言われても困りまくるんですよ。そんな事は口に出来ない俺はしばらく考え込んでしまって、ルイズと目を合わせているのが気まずくなって目を瞑ると言う強行により視線から逃れると返す言葉を考える。

しかし出てこない。ヤバイこの沈黙に流石の奥義、閉目ももたなくなってきたぞとか思ってたときだった。ルイズが不意にゴメンと言った。

そこでそういわれると、こちらが困るんですよ……ルイズさん。そんな悲しそうな目でみんといてっ！

何か言葉を言おうとして出てきた言葉はあまりに矛盾だらけな言葉で、正直終わったと思った……。

だが、意外にもルイズは笑顔で、そうなんだ、ゴメンねと言ってから、ビルさんの事もあるしそろそろ戻ろうか。

そんなふうに呟いた。はて、ルイズってこんなにいつも笑顔の子

だったけか？　と、僅かな疑問を残しながら俺はその場を後にした。

［Ｓｉｄｅ：ルイズ］

『ルイズ嬢のおなーりー……』

そんな係りの者の声が聞こえて私はゆっくりと会場に入った。

「おい……あれ……」

「ああ、ホントにルイズかよ……」

いつもは私を馬鹿にするクラスメイトの男共は唖然とした表情で私を見ていた。

現金なものだ、いつもは私を蔑んだ目で見ているというのにちょっと着飾って女を意識しただけでコロコロと態度を変えて。

ゆっくりと進む途中でダンスを誘ってくる男達を無視して私は彼を探す。広い会場を見渡して会場内には誰もいないことに気がついた。部屋に戻ってきてくれといったのに帰ってこなかったから、もしかしてこないのだろうかと不安になっていたのだがもしかしたら本当に来ていないのだろうか？

後は残っているのはテラスくらいなものである。尚もイライラするぐらいに此方にちかづいてくるハエ共を払いのけながら私はテラ

スに出た。

「いない……」

此処にも彼はやはり居なかった。半ば予想していた事といえどもやはりショックだった。ふうと溜息をついて休止の置いていったワインを口に含む。

――綺麗な月夜に舞踏会、ワインとあとはアルトが居れば完璧だというのに。

そんな事を考えたところで、ちょっと強い風が吹いて寒いと感じた私は会場に戻ることにした。季節は春だけどドレスにはまだ肌寒い時期だ。

「はぁ……」

これからどうやって舞踏会をやり過ごそうかと思いながら踵を返して――そこで私は動きを止めた。

何か動く物音が聞こえて視線をたまたま向けた先に誰かが居た。普段ならメイドかなんかだろうと思って気にしないのだが今日はアルトが居ないからだろうか、気になってしょうがなかった。

そしてそれはまさしくアルトだった。暗くてよく見えなかったが、僅かに見えたあのナイトタキシードは彼に違いがなかった。そしてその背には秘書のミス・ロングビルがいて――

「何やってんのよ……！」

それで、私はなんか無性に腹が立った。そんなところで何をしてるのだと。今この夜居るべきは私の隣でしょう、と。

私は居てもたっても居られなくなって、会場に戻り、未だ五月蝿い男を無視して会場を出た。

ドレスの裾を両手でもって汚れないようにしながら階段を下りた私はそのまま外に出る。きょろきょろと辺りを見渡す、あの方向ならばこの辺りに居るはずだ。そんなふうに考えてそちらの方に走る。

しばらくしてヴェストリの広場に着いたところで私は彼を見つけた。不意に彼がこちらを振り向いて、私と目が合った。

「ルイズ……？」

彼の軽く困惑した様子を無視してズンズンとアルトとの距離を縮める。

「部屋に戻ってきてっていったのに……なにしてるのよ」

そんな言葉が自然に出てしまった。きっと今の私の顔は完全にむくれて可愛くないだろう。

「すみません、ルイズ……行こうと思ってはいたのですが」

そう言って彼は後ろに視線を移した。そこには緑の髪をしたミス・ロングビルその人がいた。私は更に自分が不機嫌になるのが分かった。良く意味が分からなかったけど心がもやもやした。

とにかく、その背に彼女が居るのが嫌だった。

無理を言っておろさせ、私が背負ってみる。しかし、彼女よりも背が小さい上に非力、極め付けに歩きにくいドレスである、可愛くない本気の気合を入れて持ち上げようとしたが結局私は押しつぶされた。

そんな私に彼はクスッと微笑んだ。

その表情は月を背後にしたせいだろうか妙に際立っていて、珍しいアルトの……もしかしたら初めてかもしれない笑顔にまるで吸い込まれるような錯覚をした。

顔が見る見るうちに火照るのが分かる。

「ア、アルトが悪いんだからっ！」

何が悪いのか分からなかったが、私は咄嗟にそう言って誤魔化すと彼にそっぽを向いた。だというのに彼の表情が気になってチラッと覗き見る。

そして彼と目線が会って慌てて視線を戻す。

「一体どうしたのよ、何で……ミス・ロングビルと居るの……」

ぶっきらぼうにそう言った彼にその経緯を話してくれた。そして聞いていくうちになんか凄く自分に恥ずかしいというか、叫びたくなったと言うか……とにかく気恥ずかしくなった。

自分が浅はかな独占欲じみたものを自分の中に作っている事に気がついたからだ。ただたんに気分が悪くなって倒れた彼女を運んで

いただけだったと言うのに自分ときたら。

大体においてアルトには、アルトリアという――

「ねえ……アルト……」

胸が締め付けられるような気がして私は次の瞬間には口を開いていた。私の言葉にアルトはミス・ロングビルを背中に背負いながらなんですかと返した。

こんな事絶対に聞いちゃいけないのに、分かってるのに何故か私の頭はそれを止めることが出来なくて。

優しい彼に甘えてたんだろう。きっと彼が傷つくと分かっていながら自分の気持ちの平穏のために、口から嫌な台詞が漏れていた。

「アルトリアのこと……――」

――おぼえてる？

そう言おうとして私は先を言う事ができなかった。何か大事なものが崩れそうだったから。

そんな私の言葉にアルトは一瞬目を細め、何かを考えているかのように一旦間を置いてから瞳を閉じた。

「ご、ごめん……」

何も言おうとしないアルトに私は猛烈に不安になって咄嗟に謝っていた。でも、それに対してアルトは、いえ……と言うとそれに言

葉を続けた。

「――……忘れてしまいましたよ？」

そしてそんな事を言うと笑顔を私に向けた。

何も言葉が返せなかった。胸が痛かった。

本当に忘れているなら、アルトリアという言葉自体に疑問を挙げるだろう。アルトリア？　それは誰なのかと。それを忘れてしまったと言えると言う事は、つまり――

ズキッと私の中で何かを抉った。アルトの優しさが逆に痛かった。

こんな事を聞いてしまった事に私は今更猛烈に後悔していた。

後悔していたはずなのに、だと言うのに――

――どこかアルトの言葉に安堵してる自分が居て、本当は忘れているはずがないのにそんな言葉の一つで心のうちで嬉しがっている自分が猛烈に――嫌だった。

私、最悪だ――

とても――舞踏会に行く気に離れなかった。

第六話『だんだん原作から乖離されていくようです』（中編）（後書き）

出来よくねえ……デルフのくだりを書くはずだったのに……と思いつつのあとがきです。

『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』

自分の過去と照らし合わせて泣きました。

別に幼馴染は死んではいないですが、幼稚園、小学校と一緒だった幼馴染の女の子は中学で疎遠になって、でも、中学の修学旅行のとき私ににさりげないアピールをしていてくれたのにまだ恋とかよくわかってなかった私はそれを逃してしまって、で、あとで告って、彼氏がいることを知って、その時その子が言った『今更そんなの……遅すぎるよ』って言う言葉を思い出して欝になった鞍馬天狗です。

学園黙示録見て麗が孝に言ったこれにそっくりなことばでも思い出して欝になったと言うのに学習しませんね（笑）

『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』略して『あの花』マジで面白いんで皆さん見てくださいね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5091j/

零の役者～Fateの劇をやってたらルイズに召喚されました～（勘違いもの）

2011年5月9日06時57分発行